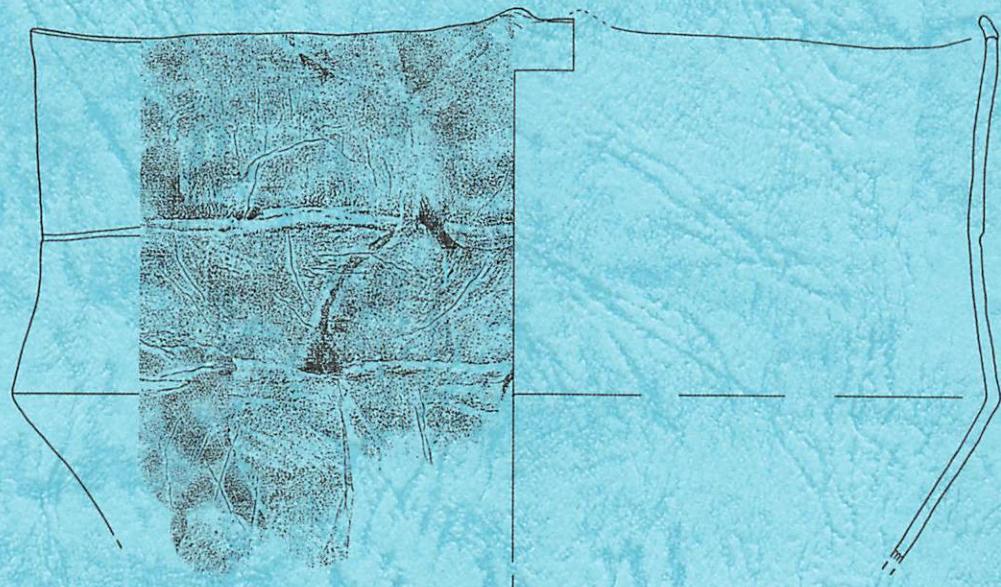


川辺西原遺跡

川辺地区県営土地改良総合整備事業に伴う発掘調査



山鹿市文化財調査報告書第15集

2004

熊本県山鹿市教育委員会

川辺西原遺跡

川辺地区県営土地改良総合整備事業に伴う発掘調査

山鹿市文化財調査報告書第15集

2004

熊本県山鹿市教育委員会

序 文

山鹿市教育委員会では、このたび川辺地区県営土地改良総合整備事業の農道整備に伴い熊本県山鹿市大字保多田字真坂原に所在する「川辺西原遺跡」の発掘調査を実施いたしました。この遺跡は昭和42年の圃場整備事業で初めて確認され、縄文時代後期から晩期にかけての遺跡であることが知られています。遺跡の東側には弥生時代中期の大形甕棺を出す川辺小学校校庭遺跡も隣接しており、菊池川を足下に見下ろす標高85～90mの台地上に遺跡が存在していることも含め、山鹿市の原始・古代を考える上において重要な地域となっています。

山鹿市には装飾古墳をはじめ数多くの文化財が残されておりますが、旧石器時代や縄文時代の遺跡は少なく、この時代の遺跡の調査は久々のことあります。今回の調査では道路拡幅部分のみの調査でしたが、昭和42年の圃場整備事業の際に出土した遺物も併せて報告し、遺跡の性格を少しでも明らかにし後世に伝えたいと考えております。

今回の発掘調査によって遺跡に生きた人々の息吹を少しでも感じ、彼らの暮らしぶりや知恵を読み取る事が出来れば幸いです。

最後になりましたが、調査に当たって熊本県農政部、熊本県地域振興局農林部農地整備課、熊本県教育庁文化課等の機関や周辺地権者の皆さんには多大のご協力をいただき深く感謝申し上げます。

平成16年3月31日

熊本県山鹿市教育長 田中 宏

例　言

1. 本書は、川辺地区県営土地改良総合整備事業に伴い、県よりの委託を受け山鹿市教育委員会が実施した川辺西原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、山鹿市教育委員会が主体となり、山鹿市立博物館に於いて実施した。
3. 調査現場における写真撮影・遺物取り上げなどは椎葉・土野で行ない、遺構実測については（有）遺跡整備計画に委託したほか、一部を椎葉、土野、島崎、田上、山崎が行なった。
4. 本書においては、方位を国土座標に拠っている。
5. 出土遺物の洗浄・注記・接合などの整理作業は、山鹿市出土文化財管理センターにおいて実施した。
6. 本書所収の遺物実測については、土器を小原、土野、城が行ない、石器は王丸、椎葉、土野が行なった。拓影および実測図のトレスは前述6名が担当し、遺構のトレスは手描きを土野が、デジタルトレスを王丸が行なった。
7. 遺物の各実測図のスケールは原図の1/2で極力統一を図ったが、やむを得ず縮尺を変えたものもある。黒曜石・サヌカイト系石器を原図の2/3に、大型の遺物については1/3サイズとした。
8. 図版の遺物写真撮影は酒井、椎葉がデジタルカメラで行ない、データの加工および編集はすべて椎葉が担当した。遺物写真のスケールは不統一である。
9. 本書の執筆および編集は土野が担当し、中村が監修した。

目 次

序文
例言
本文目次
表目次
挿図目次
図版目次
参考文献

本文目次

第1章 調査の契機と経過

1-1 調査に至った経緯	1
1-2 調査組織	1
1-3 報告書関係組織	1
1-4 調査経過	2

第2章 周辺の環境

2-1 地理的環境	4
2-2 歴史的環境	6

第3章 調査の成果

3-1 遺跡概要	9
3-2 遺跡の立地と調査区の設定	9
3-3 1区の調査成果	13
a. 1号溝	13
b. 遺構外出土遺物	17
3-4 2区の調査成果	18
a. 1号土坑	18
b. 1号道路	23
c. 遺構外出土遺物	25
3-5 3区の調査成果	30
a. 遺構外出土遺物	30
3-6 調査区周辺の参考資料	31
a. H15調査区外出土遺物	31
b. 西原遺跡出土遺物	33
c. 土馬	44

第4章 総括

4-1 遺構	45
4-2 遺物	45
4-3 遺跡の性格	47

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	8
第2表	川辺西原遺跡杭座標一覧表	9
第3表	1号溝出土遺物観察表	16
第4表	1区遺構外出土遺物観察表1	17
第5表	1区遺構外出土遺物観察表2	17
第6表	1号土坑出土遺物観察表1	22
第7表	1号土坑出土遺物観察表2	22
第8表	1号道路出土遺物観察表	23
第9表	2区遺構外出土遺物観察表1	25
第10表	2区遺構外出土遺物観察表2	26
第11表	3区出土遺物観察表	30
第12表	H15調査区外出土遺物観察表	31
第13表	西原遺跡出土遺物観察表1	34
第14表	西原遺跡出土遺物観察表2	38
第15表	西原遺跡出土遺物観察表3	38
第16表	西原遺跡出土遺物観察表4	39
第17表	西原遺跡出土遺物観察表5	43
第18表	土馬観察表	44

挿図目次

第1図	山鹿市小字地図	4
第2図	熊本県北部菊池川中流域の地質図	5
第3図	周辺遺跡分布図	7
第4図	遺跡位置図	10
第5図	川辺西原遺跡基準杭位置図	11-12
第6図	1区基本層序図	13
第7図	1区遺構配置図	14
第8図	1号溝実測図	15
第9図	1号溝延長プラン略測図	15
第10図	1号溝断面図	16
第11図	1号溝出土遺物実測図	16
第12図	1区遺構外出土遺物実測図	17
第13図	2区基本層序図	18
第14図	2・3区遺構配置図	19-20
第15図	1号土坑実測図	21
第16図	1号土坑出土遺物実測図	22
第17図	1号道路実測図	24
第18図	1号道路断面図	24
第19図	1号道路出土遺物実測図	24
第20図	2区遺構外出土遺物実測図1	26

第21図	2区遺構外出土遺物実測図2	27
第22図	2区遺構外出土遺物実測図3	28
第23図	2区遺構外出土遺物実測図4	29
第24図	3区基本層序図	30
第25図	3区出土遺物実測図	30
第26図	H15調査区外出土遺物実測図1	31
第27図	H15調査区外出土遺物実測図2	32
第28図	H15調査区外出土遺物実測図3	33
第29図	西原遺跡出土遺物実測図1	35
第30図	西原遺跡出土遺物実測図2	36
第31図	西原遺跡出土遺物実測図3	37
第32図	西原遺跡出土遺物実測図4	38
第33図	西原遺跡出土遺物実測図5	38
第34図	西原遺跡出土遺物実測図6	40
第35図	西原遺跡出土遺物実測図7	41
第36図	西原遺跡出土遺物実測図8	42
第37図	西原遺跡出土遺物実測図9	43
第38図	土馬実測図	44

図版目次

- PL 1 川辺西原遺跡遺構内出土遺物
- PL 2 川辺西原遺跡遺構外出土遺物およびH15調査区外出土遺物1
- PL 3 川辺西原遺跡遺構外出土遺物およびH15調査区外出土遺物2
- PL 4 西原遺跡出土遺物1
- PL 5 西原遺跡出土遺物2
- PL 6 西原遺跡出土遺物3および土馬
- PL 7 西原遺跡出土遺物4
- PL 8 上 1区全景（北より）
中 2区全景（北より）
下 3区全景（北より）
- PL 9 上 1号溝検出状況（東より）
中 1号溝断面（東より）
下 1号溝完掘状況（西より）
- PL10 上 1号溝延長プラン（東より）
中 1-A区内土層断面（東より）
下 1区土層断面全景（北より）
- PL11 上 1号土坑検出状況（西より）
中 1号土坑断面（西より）
下 1号土坑（完掘）（西より）
- PL12 上 1号道路検出状況（西より）
中 1号道路セクション（西より）
下 1号道路完掘状況（東より）
- PL13 上 2-D区土層断面（1号道路付近）

中 2区土層断面全景（南より）
下 2-G区土層断面（東より）
PL14 上 調査区周辺風景（北より）
中 作業風景
下 調査現場作業員

第1章 調査の契機と経過

1-1 調査に至った経緯

山鹿市の鍋田台地・川辺台地上に位置する鍋田地区・川辺地区では、土地開発に伴い昭和20年代後半から遺跡の存在が知られていた。山鹿市立川辺小学校およびその周辺からは、昭和28年・29年・33年に弥生時代の甕棺墓が相次いで発見されているほか（川辺小学校遺跡）、昭和42年には川辺小学校の北西約500m付近の鍋田台地から縄文時代の甕棺群が開田工事に伴って発見されている（西原遺跡）。

平成14年度の川辺地区県営土地改良総合整備事業に伴い、山鹿市大字保多田地内において農地の一部が工事予定地となった。当該地は西原遺跡の辺縁部に当り、遺構および遺物の存在を十分に予想させたことから、県による試掘調査の実施となった。

試掘調査は平成14年度に県文化課によって実施され、予想通り、縄文時代、中世の土器片及び遺構の一部が確認されたことで、工事予定地のうち農道部分に当たる366m²を調査対象に、遺跡名を川辺西原遺跡として本調査が決定された。

調査期間は、試掘結果に加え、圃場整備の工事請負業者をまじえた協議によって、年明け早々の平成15年1月に開始し、当月中に終了することとなった。

1-2 調査組織

調査主体 山鹿市教育委員会
総括 田中 宏（山鹿市教育長）
調査団長 隅 昭志（山鹿市立博物館館長）
調査事務 東 隆典（山鹿市立博物館管理係長） 松永きみよ（山鹿市立博物館主査）
調査員 中村幸史郎（山鹿市立博物館副館長） 前田軍治（山鹿市出土文化財管理センター嘱託）
山口健剛（山鹿市立博物館主事）
調査補助員 椎葉天昭 士野雄貴
現場作業員 井口計介 上田 満 江崎達彦 小山武行 酒井隆行 佐藤昭三 島崎貴代子 田上亞紀
築嶋節子 富田勝四郎 永田 敬 松永淳志 山崎絹子 若杉清美
整理作業員 小川穂奈美 音光寺里美 音光寺真理香 立山仁美 田中裕子 松村起代 和賀智子
調査協力 (有)遺跡整備計画 (株)北建機 (株)高喜工業 齊藤新一 松本誠剛

1-3 報告書関係組織

総括 田中 宏（山鹿市教育長）
責任者 隅 昭志（山鹿市立博物館館長）
事務担当 松永高明（山鹿市立博物館副館長） 北原美智子（山鹿市立博物館主査）
吉田幹男（山鹿市立博物館主任主事） 山口健剛 宮崎 歩（山鹿市立博物館研究員）
担当 中村幸史郎（山鹿市立博物館首席研究員） 前田軍治 椎葉天昭 士野雄貴
整理作業員 岡 小夜子 小原朱美 古閑美奈 城 葉子 田上亞紀 中山三恵子 森 みつよ
山口美智子
指導助言 / 協力 江本 直（県立装飾古墳館） 王丸ゆかり（崇城大学4年）
黒田裕司（三加和町教育委員会） 酒井隆行 坂本重義（南関町教育委員会）
(敬称略)

1 - 4 調査経過

平成14年12月20日（金）

13:30に業者と待合せ。川辺小学校側で合流、現地へ。

設置場所周辺および調査区内の除草作業と道具等の搬入、整理を行う。

平成15年1月6日（月）

9:00より重機による表土剥ぎを行ない、午前中に北側の耕地（1区）、午後から中央の耕地（2区）へと作業を進めた。

1区にて1号溝検出。

1月7日（火）

現場作業員作業開始。

1月8日（水）

2区にて1号道路検出。

1月10日（金）

仮設道路敷設のため表土を除去した箇所に1号溝の延長プランを確認。

15:00過ぎに河村市長来訪。

1月15日（水）

2区より1号土坑検出。

1月17日（金）

松本誠剛氏来訪、氏が学生の時配水管を埋設した由を拝聴する。

1月18日（土）

業者によるグリッド杭敷設。

1月20日（月）

業者による幅杭敷設、水準観測。

天候不良につき、現場は15:00過ぎで終了した。

1月21日（火）

調査区隣の耕作者夫妻に話を伺ったところ、1号道路付近には確かに昔道路が通っていた由確認する。その延長線一九電の鉄塔付近一はちょっとした高まりになっていたそうで、その東麓に沿って緩やかに湾曲しつつ現農道の延長上にある切通しの痕跡へと連絡していたことも併せて拝聴することが出来た。

1月23日（木）

雨天につき現場は終日休止。

1月27日（月）

雨天につき現場は終日休止。

1月28日（火）

1区のすぐ北側付近を（工事業者が）掘り込んだ際に出たと思しき排土中から大量の土器片を検出した。中には割れ口の新しいものもあって接合の可能性がきわめて高い。ただ、周辺の掘り込まれた箇所を精査してみたが遺構らしきものは確認し得なかった。

1月29日（水）

雨天につき現場は終日休止。

2月4日（火）

現場作業員作業終了。

午前中小雨が降り出してきたが、何とか撮影を終え、15:30に現場を離れる。

2月12日（水）

業者による調査区埋め戻し。

2月18日（火）

現場撤収。

（以上、調査日誌を抄録）

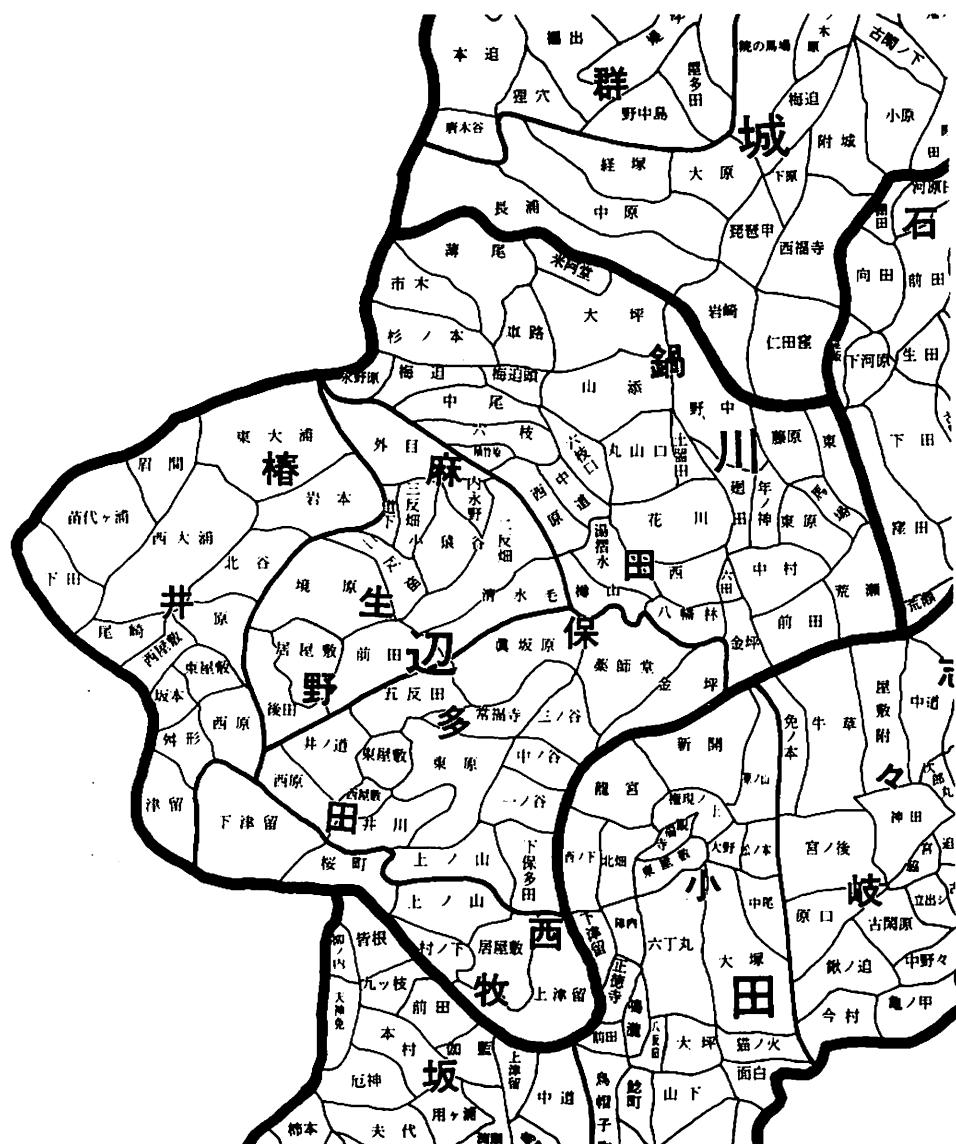
第2章 周辺の環境

2 - 1 地理的環境

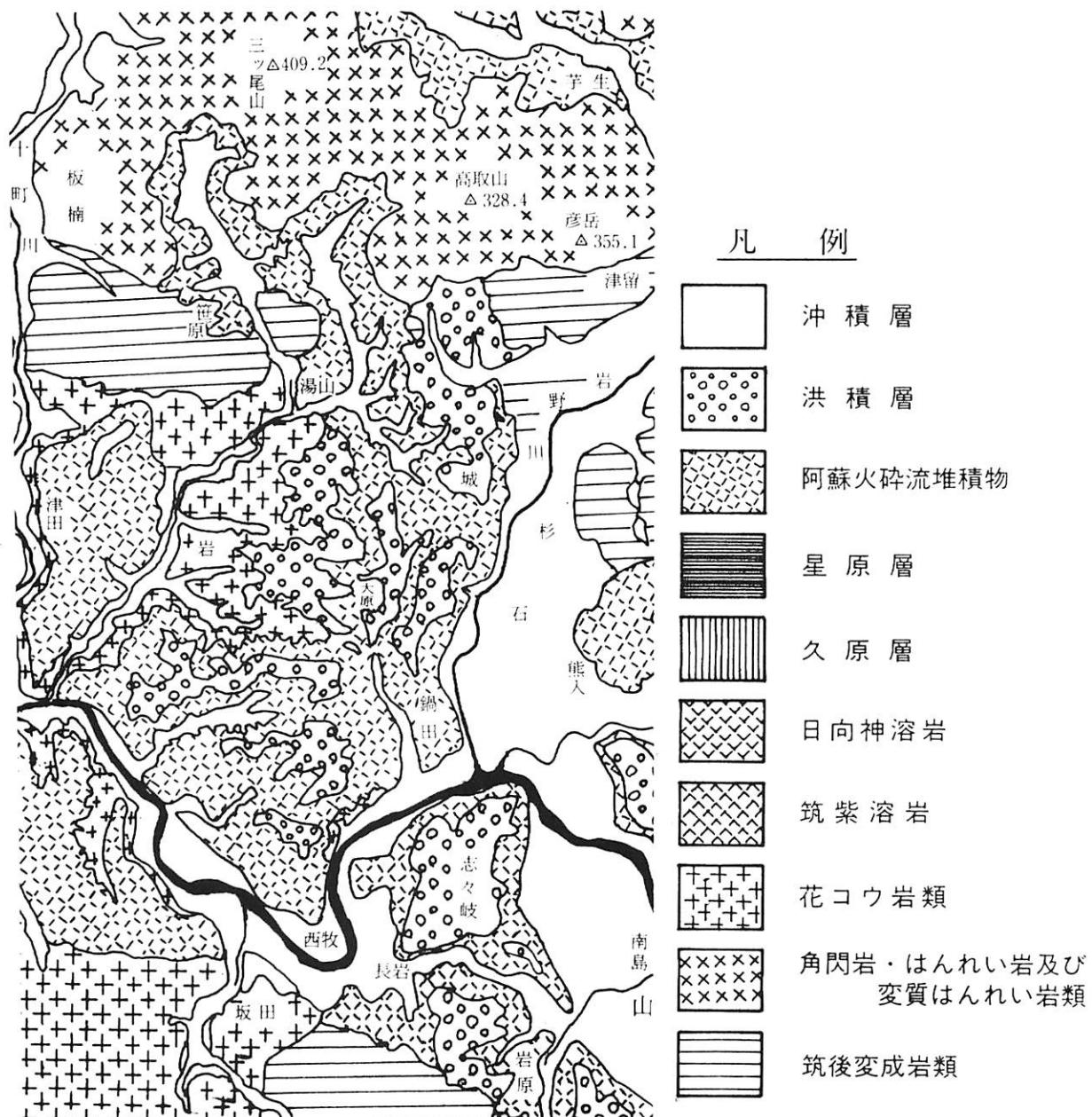
川辺西原遺跡は、熊本県山鹿市西部の川辺台地上に立地する。川辺台地は、隣接する平小城台地・鍋田台地などと同様、阿蘇火碎流堆積物を中心に形成された標高84m～87mの台地である。山鹿市北西部にそびえる彦岳（標高355.1m）・高取山（標高328.4m）・三ツ尾山（標高409.2m）などの連なる山塊から南へ突き出した火山岩性丘陵が、洪積世へ入って氷河等の浸食作用による堆積物によってさらに成長、そこへ阿蘇山の噴火に伴う火碎流堆積物が加わる。その後、県内有数の1級河川である菊池川水系の浸食作用によって複雑に入り組んだ麓辺を形づくり、今日見られる台地を形成したと考えられる。

上記の通り、川辺台地の地質構造はその大部分が阿蘇火砕流に起源を持つ溶結凝灰岩層からなるが、台地中央部には洪積層、台地の北部を中心に花崗岩類などの火山岩層が見られる（第2図）。

遺跡の立地する地区の小字名「真坂原」が示すよう（第1図）、一帯は平坦な地形をなしていたと見られ、周辺に見られる「二反畠」「三反畠」などの小字名が表すように、耕作地としての性格の強い土地であったと考えられる。事実、昭和40年代には大規模な開田工事が、また平成14年度には本調査の契機となった川辺地区県営土地改良総合整備事業が実施されるなど、現在に至るまで耕作地としての土地利用が中心である。



第1図 山鹿市小字地図 〔山鹿市史〕付図より抜粋



第2図 熊本県北部菊池川中流域の地質図
(『山鹿市史』付図より抜粋)

2 - 2 歴史的環境

川辺台地とその周辺には、縄文時代から繰り返し人々の生活が営まれてきた。

縄文時代の各遺跡は、川辺台地・鍋田台地・平小城台地などのほか、菊池川対岸の志々岐台地など、その大半が台地上に営まれている。菊池川の水害を避けるとともに、水はけの良いというこれら各台地の地質的特性に注目したと考えられる。

今次調査地点がその一部にかかる西原遺跡は、縄文晩期の甕棺墓群としての性格を有している。

東の鍋田台地には東鍋田遺跡があり、早期～晩期の遺物が層序的に把握されているほか、イネ科植物の存在が判明している。この東鍋田遺跡から北へ500mほどの地点に山鹿市立博物館敷地内遺跡があり、晩期（山ノ寺式）の甕棺を1基出土している。

さらに北へ約1km、平小城台地上には城・下原遺跡があり、後期～晩期の遺物とともに緑泥片岩製の扁平打製石斧を中心とした石器を出土している。

一方、菊池川をはさんだ対岸の志々岐台地には、字牛草・字屋敷付・字免本にかけて牛草遺跡があり、御領式土器をともなう住居址群が確認されている。

水稻耕作を社会基盤とした弥生時代に入ると、遺跡の立地は台地上に限らず、台地辺縁部や平地内の微高地へも拡大していく。川辺小学校とその周辺では、昭和28年から3回にわたって調査が実施されており、中期の須玖式を中心とする甕棺10数基を確認している（川辺小学校遺跡）。甕棺墓はこの外に、志々岐台地西麓の北畠遺跡のほか、大字石の金屋塚遺跡などが確認されている。

古墳時代に入ると、古墳や石棺墓を中心に遺跡は急増する。今次調査区に近いところでは、遺跡の南南東200m付近に営まれた大字保多田の保多田古墳（心無い工事業者によって破壊され完全に消滅。その際鉄剣を出土したと云うが現在は所在不明）や、西方1km付近の大字椿井字東屋敷の御園石棺群・南方約1km地点の西牧上津留石棺群（大字西牧字上津留）をはじめ、鍋田台地の鍋田横穴群・オブサン古墳・チブサン古墳・西福寺石棺群、鍋田台地東の金屋塚古墳・臼塚古墳、平小城台地の付城横穴群・馬塚古墳などのほか、菊池川対岸の志々岐台地周辺には小原大塚古墳群・小原大塚横穴群・長岩横穴群などが営まれ、さらにその南で鹿本郡鹿央町の岩原台地にある岩原古墳群・岩原横穴群と併せて一大古墳群を形成している。

しかし、古代に入ると遺跡は激減し、川辺台地上において確認されるものは僅かに大字椿井の則重館跡のみとなる。これは、条里制にともなう耕地利用の低湿地への集約と関係していると考えられ、事実、鍋田台地東の岩野川沿いの低地では石条里跡（大字石）が確認されている。

川辺台地上の遺跡分布は中世に入ってもさしたる変化はなく、大字西牧に隈部親広屋敷跡が営まれたくらいであるが、ただ鍋田台地に西福寺跡が見られることは、その周辺に寺領としての耕作地の存在を想定でき、開墾の結果による台地上の耕地化が進行していたことを窺わせる。

この性格は近世期にも継続され、その名残を字名にとどめつつ今日に至っている。



第3図 周辺遺跡分布図 (「熊本県遺跡地図」より引用)

第1表 周辺遺跡一覧表
(「熊本県遺跡地図」より抜粋)

熊本県 (43) 山鹿市 (208)

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
031	大原	城 大原	縄文	包蔵地		
038	馬塚古墳	城 鬼天神	古 墳	古墳	県	円墳、横穴小口積石室、内部装飾あり
039	馬塚南古墳	城 鬼天神	古 墳	古墳		
040	付城	城 付城	古 代	包蔵地		
041	東付城跡	城 付城	中 世	城		
042	付城横穴群	城 付城・小原	古 墳	古墳	県	岩盤に10数基
043	河童塚古墳	杉 古屋敷	古 墳	古墳		円墳、切石小口積石室、人骨2
044	姫塚古墳	杉 古屋敷	古 墳	古墳		
045	西福寺跡	城 西福寺	中 世	寺社		禪の古刹
046	西福寺古墳	城 西福寺	古 墳	古墳		
047	オブサン古墳	城 西福寺	古 墳	古墳	国	円墳、横穴單式小口積石室、裝飾
048	チブサン古墳	城 西福寺	古 墳	古墳	国	前方後円墳、横穴式小口積、複石室、厨子、裝飾
049	西福寺磨崖仏	城 西福寺	中 世	石造物	市	
055	野中	鍋田 野中	縄文～中世	包蔵地		
056	石村	石	弥 生	包蔵地		
059	西付城跡	城 付城	中 世	城	市	
061	経塚	城 経塚	中 世	経塚		
062	下田	石 下田	中 世	包蔵地		
067	西福寺古墳群	城 西福寺	古 墳	古墳		
083	椿井箱式石棺 (椿井古墳)	椿井 東屋敷	古 墳	埋葬		人骨2体、小刀出土、石祠をまつる
084	御園古墳	椿井 東屋敷	古 墳	古墳		箱式石棺
085	西牧石棺群	西牧 上の山	古 墳	埋葬		箱式石棺群
086	御園石棺	椿井 (通称御園)	弥生～古墳	埋葬		石棺
087	西原	鍋田 西原	縄文～古墳	包蔵地		
088	則重館跡	椿井	中 世	館		
089	東屋敷	椿井 東屋敷	弥生～中世	埋葬		
090	川辺小学校	鍋田 八幡林	弥 生	包蔵地		甕棺
091	保多田古墳	保多田 常福寺	古 墳	古墳		円墳、家形石棺
092	八幡林	鍋田 八幡林	弥 生	埋葬		甕棺群
093	龍宮石棺群	小原 龍宮	弥生～古墳	埋葬		石棺
094	中尾	小原 中尾	弥 生	包蔵地		
095	原ノ山	小原 原ノ山	古墳～古代	包蔵地		
096	牛草	志々岐 牛草	縄 文	包蔵地		縄文晚期土器片、たたき石、他
104	金屋塚	石 金屋塚	古 墳	包蔵地		
105	白塚古墳	石 白塚	古 墳	古墳	市	円墳、横穴單式石室、裝飾あり、石人
106	白塚西古墳	石 白塚	古 墳	古墳		円墳
107	金屋塚古墳	石 金屋塚	古 墳	古墳		円筒埴輪出土
108	鍋田横穴群	鍋田 荒瀬	古 墳	古墳	国	53基、裝飾浮彫
109	鍋田東古墳	鍋田 馬場	古 墳	古墳		石 (原本文字不明 横では?)・鉄劍
110	東鍋田	鍋田 東原	縄 文	包蔵地		縄文土器・布目瓦
112	五神宮石蓋土壙墓	鍋田 馬場	弥 生	埋葬		
114	年の神	鍋田 年の神	縄 文	包蔵地		
115	中村	鍋田 中村	縄 文	包蔵地		
116	宮脇古墳	志々岐 宮脇	古 墳	古墳		円墳
117	窪田	石 窪田	弥 生	包蔵地		
118	荒瀬	石 荒瀬	縄文・弥生	包蔵地		
119	中尾石棺群	小原 中尾	弥生～古墳	埋葬		
120	北畑	小原 北畑	古 墳	包蔵地		
154	坂田城跡	坂田 厄神	中 世	城		
155	上津留	西牧 上津留	縄文～中世	包蔵地		
156	小原大塚横穴群	小原	古 墳	古墳	市	小円墳
157	小原大塚古墳群	小原	古 墳	古墳		小円墳・1基は箱式石棺
158	小原城跡	小原 浦田	中 世	城		
159	長岩横穴群	小原 猫の火ほか	古 墳	古墳	県	118基、裝飾8
160	小原浦田横穴群	小原 浦田	古 墳	古墳		内裝飾2基
162	隈部親広館跡	西牧 居屋敷	中 世	包蔵地		
163	志々岐大塚横穴群	志々岐 大塚	古 墳	古墳		
190	西福寺	城 西福寺	中 世	寺社		
194	城下原	城 下原	縄文～古代	包蔵地		
202	条里跡	石	古 代	生産		

熊本県 (43) 鹿央町 (384)

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
021	岩原古墳群	岩原	古 墳	古墳	国	
161	岩原横穴群	岩原	古 墳	古墳	県	裝飾1基を含む

第3章 調査の成果

3-1 遺跡概要

前章で触れたように、本遺跡は川辺西原遺跡と命名され、昭和42年に調査された西原遺跡の一部を調査区内に内包している。

遺跡は、その南北を河川の浸食作用によって形成されたと考えられる、北東一南西方向に主軸をとる舌状地形の付け根部分に立地する（第4図）。椿井・麻生野の両集落を内包する谷地が、麻生野付近から大きく3本に分れ川辺台地中央部を深くうがつ一方で、台地の東側からは鍋田川による浸食作用が進行し、ほとんど台地から分断されかかっている。特に、本遺跡と川辺小学校遺跡、本遺跡と昭和42年調査区の立地する台地とはそれぞれ100mほどの陸地で連結するに過ぎず、地図上ではあたかも独立しているような印象を受けるが、連結部分の高低差は少なく通行は容易である。

遺跡周辺では、東方約200m付近に位置する山鹿市立川辺小学校一帯で昭和28年からたびたび発掘が行われ、その結果弥生中期、須玖式から黒髮式にかけての甕棺墓群が分布していることは確認されていたが、昭和42年11月、圃場整備事業による土地改良工事に際し、文化財パトロール中の坂本正幸氏（当時山鹿高校生）による発見を端緒とし、昭和42年11月25・26両日、隈昭志率いる山鹿高校考古学部によって緊急調査が実施されている。

本遺跡はこの西原遺跡の辺縁部に当り、本調査は同遺跡のより詳細な性格を掴む目的で実施された。

3-2 遺跡の立地と調査区の設定

本遺跡の調査区は山鹿都市基準点2級、No.121とNo.125の間に位置している。国土座標系ではおよそX=1379~1486、Y=-31777~-31862（端数を四捨五入）の範囲に相当する（第5図）。

地元地権者の耕作等への便宜を考慮し、調査区を横断する畦畔および通路は調査対象外とした。このため、調査区は大きく3箇所となった。これを北よりそれぞれ1区、2区、3区とし、一方グリッド設定は国土座標系ではなく調査区の形状に合わせて行ない、各区の北側から10m間隔で順にA、B、C、……とした。

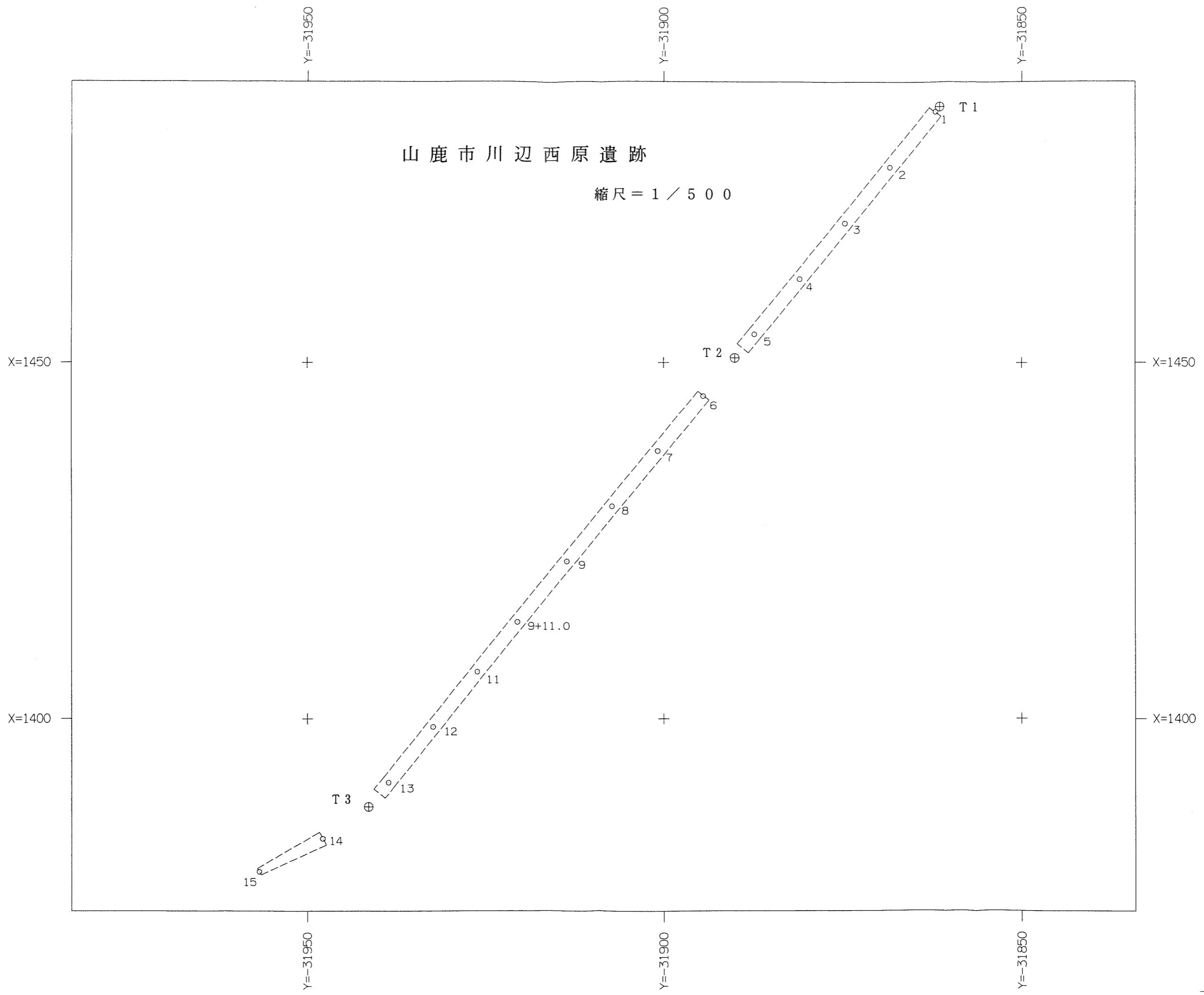
ただし3区は、長軸が10m未満であったためグリッドを設定していない。

第2表 川辺西原遺跡杭座標一覧表

No.	測点	X	Y	No.	測点	X	Y
1	1	1485.004	-31862.092	11	11	1406.592	-31926.084
2	2	1477.252	-31868.408	12	12	1398.846	-31932.412
3	3	1469.499	-31874.724	13	13	1391.106	-31938.740
4	4	1461.746	-31881.040	14	14	1383.326	-31947.882
5	5	1453.993	-31887.357	15	15	1378.747	-31956.769
6	6	1445.308	-31894.444	16	No.121	1547.704	-31776.722
7	7	1437.565	-31900.772	17	No.125	1330.222	-32066.212
8	8	1429.822	-31907.100	18	T1	1485.702	-31861.523
9	9	1422.078	-31913.428	19	T2	1450.668	-31890.066
10	9+11.0	1413.561	-31920.388	20	T3	1387.738	-31941.492



第4図 遺跡位置図



3 - 3 1区の調査成果

1区は調査区の両端で高低差が約15cmと、比較的平坦な地形をなしている。耕作土層・包含層ともに約20cmとそれほど厚くはなく、地表面から40cmほどで地山に達する。県の試掘調査時に溝状遺構が検出されており（1号溝）、本調査ではその確認を中心とした。

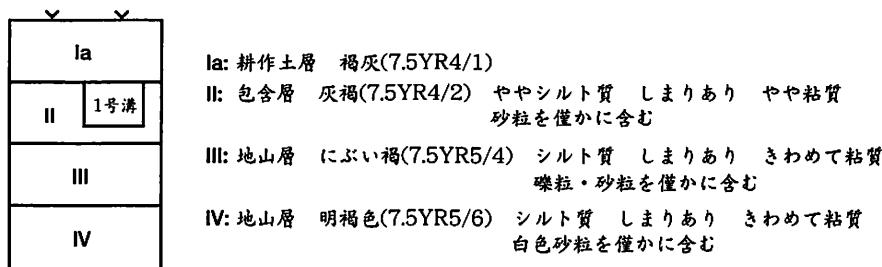
基本層序

大きく4層に分れる。

Ia層は、開田工事以後の耕作土層である。II層との境界には鉄分の沈澱が見られ、その下には花崗岩性バイ乱土（いわゆる山砂）を敷き詰めてあった。

II層は、遺物包含層とした土層であるが、1号溝はこの層から検出されている。

III層・IV層は自然堆積層、いわゆる地山層と考えられる。火山灰性堆積土層、通称ローム層を主体とする。



第6図 1区基本層序図

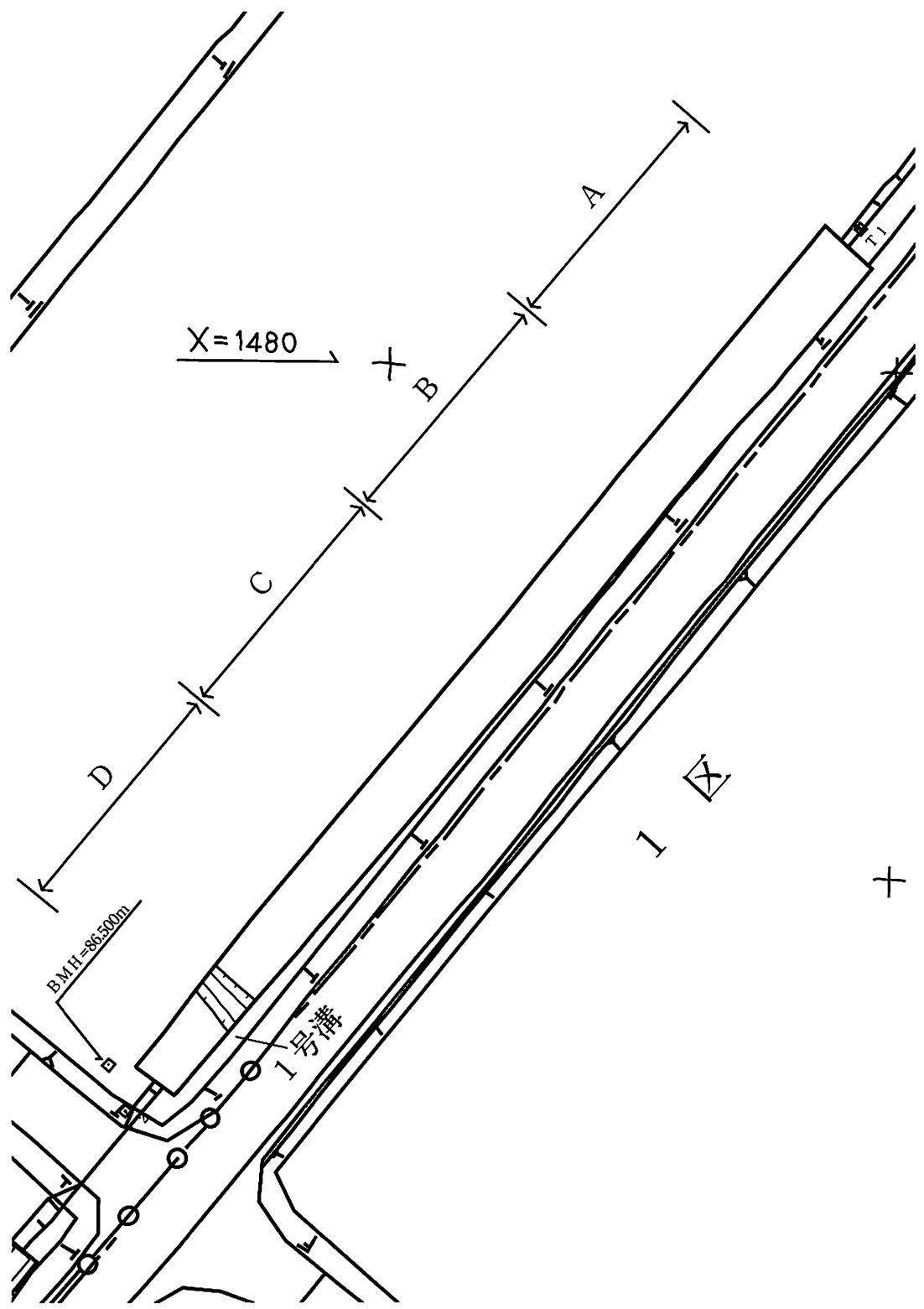
遺構

最終的に確認された遺構は試掘時に確認された溝状遺構のみである。このほかには不定形の掘り込みやピット状の小穴がいくつか検出されたもののいずれも不定形で、出土遺物もほとんどないか角の取れた土器の細片ばかりであり、遺構としての可能性は見出し得なかった。本調査では溝状遺構を1号溝とし、その他についてはピット状の小穴のみ現況図に図示した（第7図）。

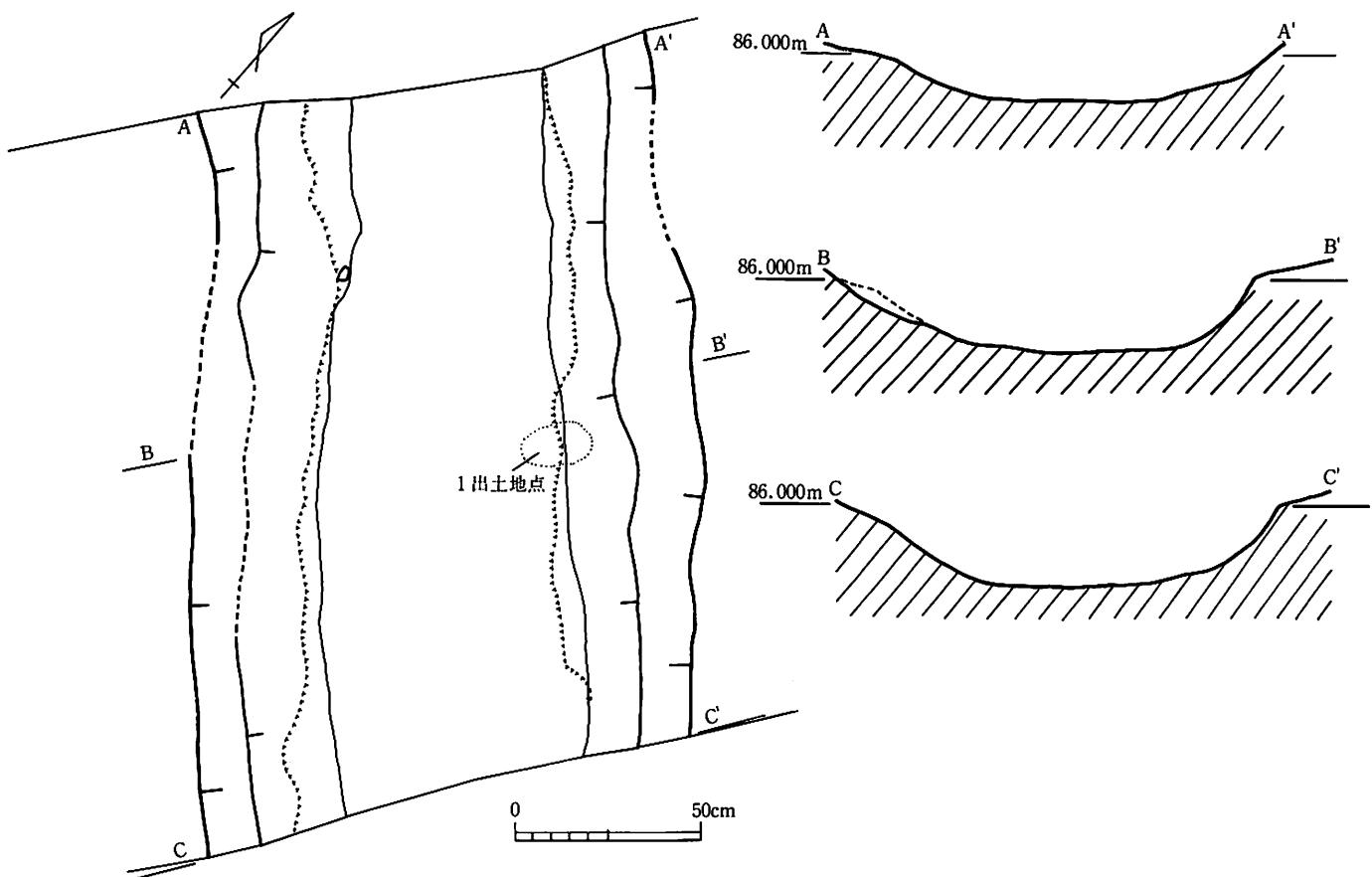
a. 1号溝

試掘調査において確認された遺構である。調査区を横断する形で検出され、120~130cm幅を測る。上部を現耕作土層によって削平されており、現況での深さは15~20cmほどであった。立ち上がりは中程で傾きが変化しており、階段状をなしていた可能性がある。底部はU字状を呈するほか、底部のほぼ全面、および法面の一部に硬化面が分布しており、通路としての性格を示唆していると考えられるが、硬化面が単層であることと、後述するが途中に陸橋状の断絶を伴うことから、通路としての利用を主目的とする遺構ではなかったと考えられる。

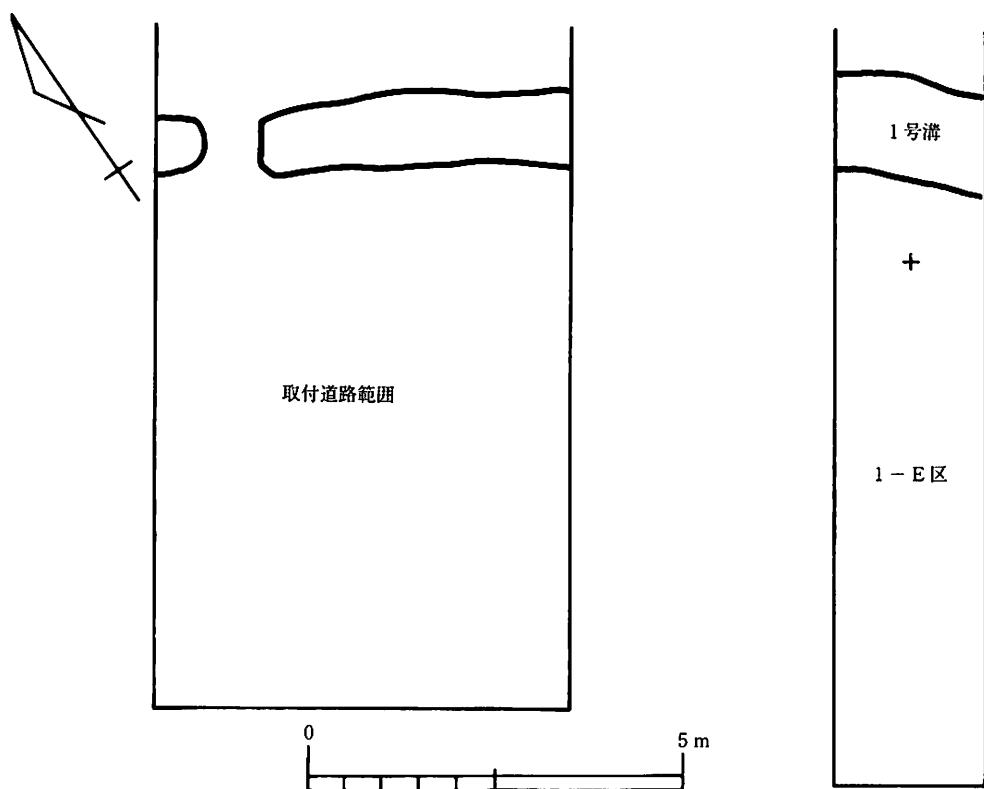
調査期間中の1月10日、調査区に並行する形で敷設された仮設道路工事に際して工事業者が重機で表土を剥ぎ取ったが、その部分で1号溝の延長ではないかと考えられる掘り込みの一部が見られた。確認作業を実施してみたところ、調査区外であることや工事の性格上から精査は出来なかつたが、それでも547cm分のプランを検出することが出来た（第9図）。プランは、調査区に近い方で112cm、反対側で66cm幅となっており、北西方向へかけてより削平を受けていると考えられる。ここで追加確認できた中に、陸橋部が認められた。中央部で74cm幅を測り、上面、および周辺については明確な硬化面は存在しておらず、土の締まりも認められなかった。



第7図 1区造構配置図



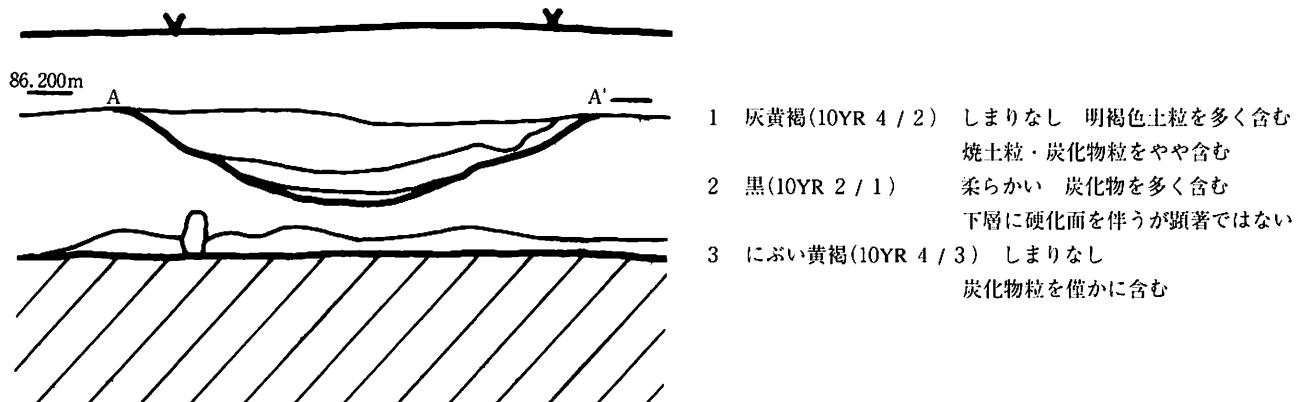
第8図 1号溝実測図



第9図 1号溝延長プラン略測図

埋没状況

3層に分れている（第10図）。層状に堆積しており、自然的な埋没であったと考えられる。埋土中に炭化物をきわめて多く含む層があり、埋没過程において遺構内部もしくは周辺で火を焚いた可能性があるが、いずれの層にも焼土粒は僅かにしか見られないので、炭化物を投棄した可能性も挙げられる。



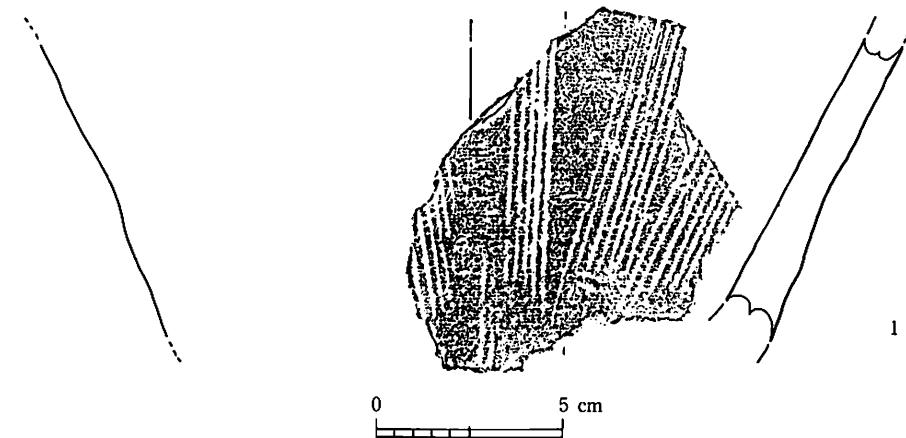
第10図 1号溝断面図

遺物

本遺構から出土した遺物は、試掘調査の際に確認された摺鉢片の外、土師器の細片などを若干出土したが、実測に堪え得るものは前述の摺鉢片以外には見られなかった（黒曜石資料が1点あるが、流れ込みによるものと見做し、遺構外出土遺物として別記する）。

第3表 1号溝出土遺物観察表

No.	出土状況	器形 / 部位	法量 (mm) 口径 / 底径 / 器高	色 調	胎 土	調 整	焼 成	備 考
1	県試 T 須恵器	摺鉢 / 脊 内径	上端209 / 下端136 (いずれも内径)	外面：黄灰(2.5Y6/1)と 暗灰黄(5/2)の中間 内面：灰(5Y5/1)	白色粒をごく僅かに含む 黑色粒を僅かに含む 角閃石をごく僅かに含む	外面：指圧痕 内面：摺目	やや軟質	径は上下の平均値



第11図 1号溝出土遺物実測図

b. 遺構外出土遺物

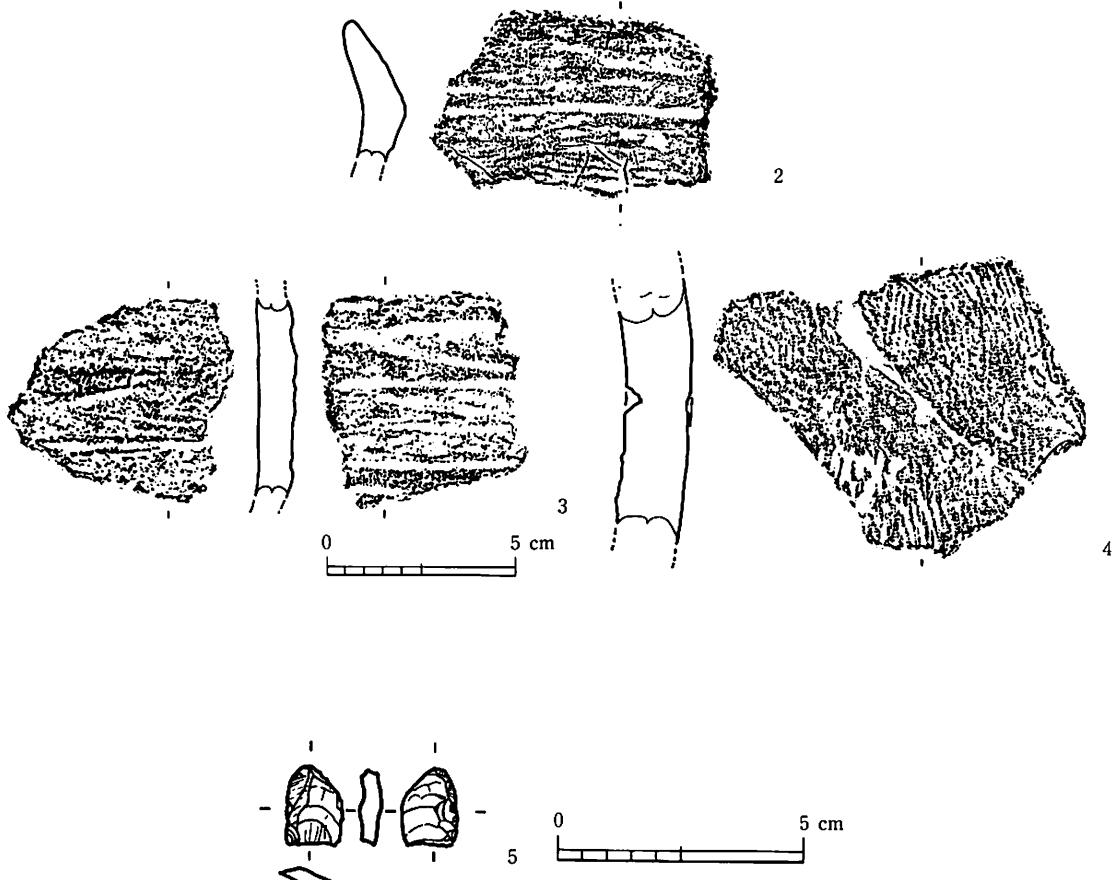
1区出土の遺物のうち、実測に堪え得るものは土器3(2~4)・石器1(5)の4点である。土器はいずれも破片で、全体の法量は不明であった。石器は黒曜石の剥片である。

第4表 1区遺構外出土遺物観察表1

No.	出土状況	器形 / 部位	法量 (mm) 口径 / 底径 / 器高	色調	胎土	調整	焼成	備考
2	1-D(P-4)	深鉢? / 口縁	破片	外面: にぶい黄褐 (10YR5/4) 内面: にぶい黄橙 (10YR6/3)	白色粒をやや多量に含む 角閃石をごく僅かに含む 雲母を多量に含む	外面: ハケ+ナデ 内面: ナデ	良好	
3	1-D一括	甕 / 脇	破片	外面: にぶい黄褐 (10YR5/4) 内面: オリーブ黒 (7.5Y3/1)	白色粒をやや多量に含む 角閃石を僅かに含む 雲母をごく僅かに含む	外面: 強いハケ 内面: ハケ	良好	
4	県試2	甕 / 脇	破片	外面: にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面: 灰黄褐 (10YR5/2)	白色粒を多量に含む 雲母を僅かに含む	外面: ハケ 内面: ナデ	良好	

第5表 1区遺構外出土遺物観察表2

No.	出土状況	器種	石材	計測値 (mm)				備考
				長さ	幅	厚さ	重量 (g)	
5	1号溝トレンチ一括	2次加工石器	黒曜石	16	11	3	1g 未満	腰岳産



第12図 1区遺構外出土遺物実測図

3 - 4 2区の調査成果

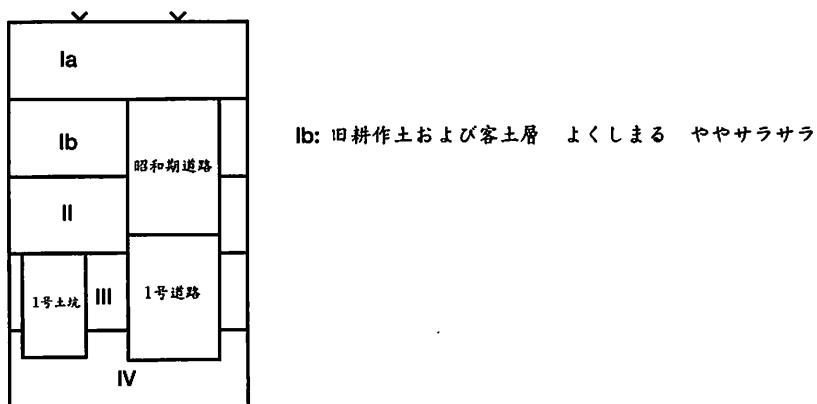
もっとも広い調査区である。約75cmと、高低差も最大である。現耕作土層は1区同様20cmほどであったが、調査区の中程から南へかけては、現耕作土層と包含層の間に客土層が確認された。客土層の厚みは最大で60cmを超えており、過去（おそらく開田工事の際）に相当規模の工事を受けたことを示唆している。

基本層序

2区では、I層が2つに分れる。

Ib層は、開田工事以前の耕作土層および客土層である。

II層以下の層序は1区と同様であるが、2-G区で層序の動転が検出された。樹痕によるものと考えられるが、工程の都合上写真による記録にとどめた（PL13下）。



第13図 2区基本層序図

遺構

調査区のほぼ中央から東西に延びる形で道路状遺構1条・土坑1基を検出したほか、樹痕1箇所、ピット状の小穴、正体不明の搅乱などを認めた。1区と同様に、現況図にはこれらのうち、ピット状小穴のみを図示するにとどめ、樹痕は断面による確認のみとした（第14図）。

a. 1号土坑

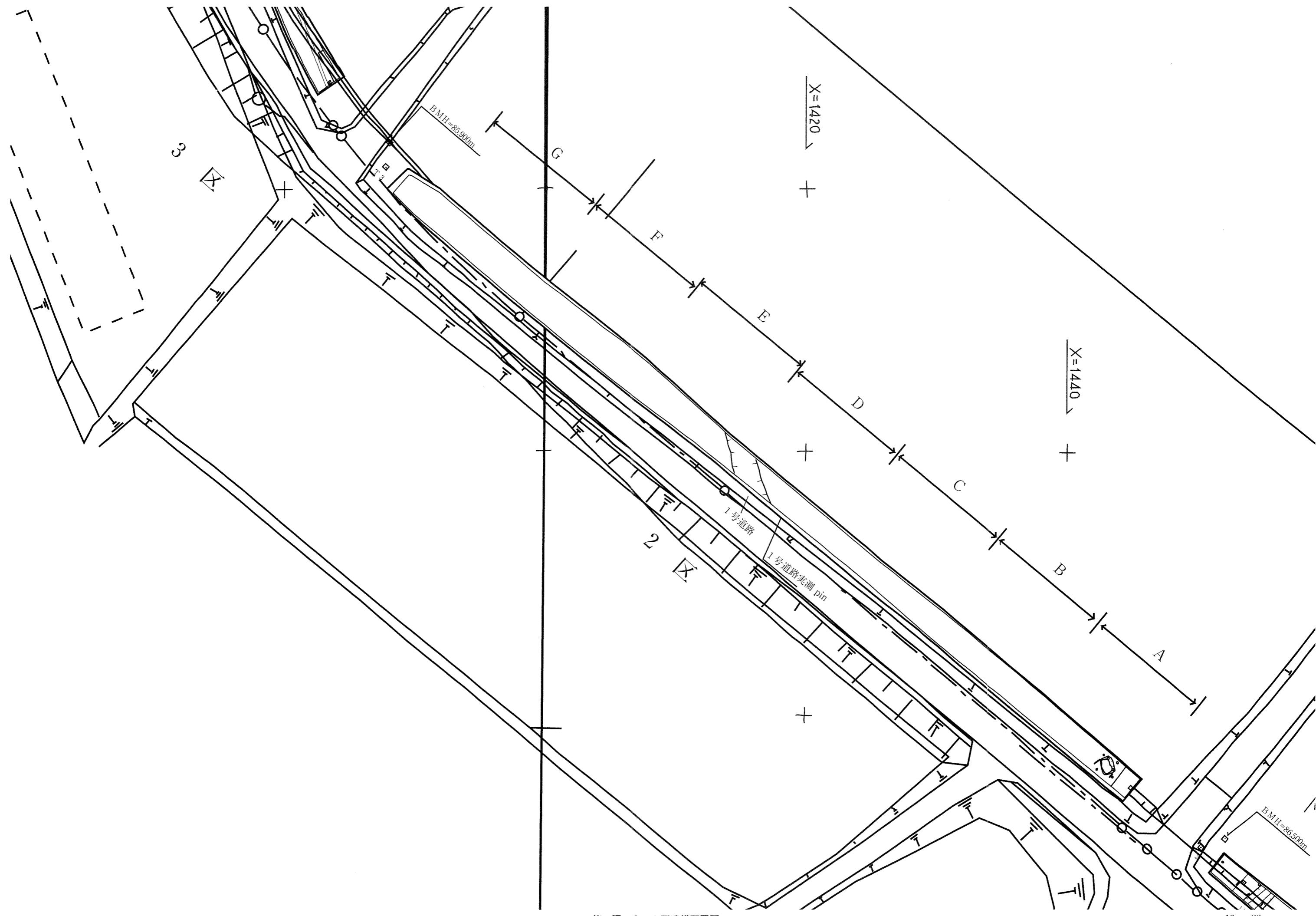
2-A区から検出された遺構である。東北東方向に主軸をとり、長軸131cm、短軸110cm、長辺がやや膨らんだ隅丸方形のプランをなしている。底部はほぼ平坦、長軸断面では中央部が僅かにくぼんでいるが、比高差は3cm程である。南側のプランの一部は袋状になっている。一方、北側の立ち上がりに階段状のテラス状プランを有するほか、北側の両隅にはそれぞれピットが設けられている。

これらのピットは、上端のプランは不定形だが、下端はいずれともに直径10cmほどであった。深さは35~45cm、それぞれ遺物は出土していない。遺構上面での確認は出来なかったことから、重複によるものではないと考えられる。

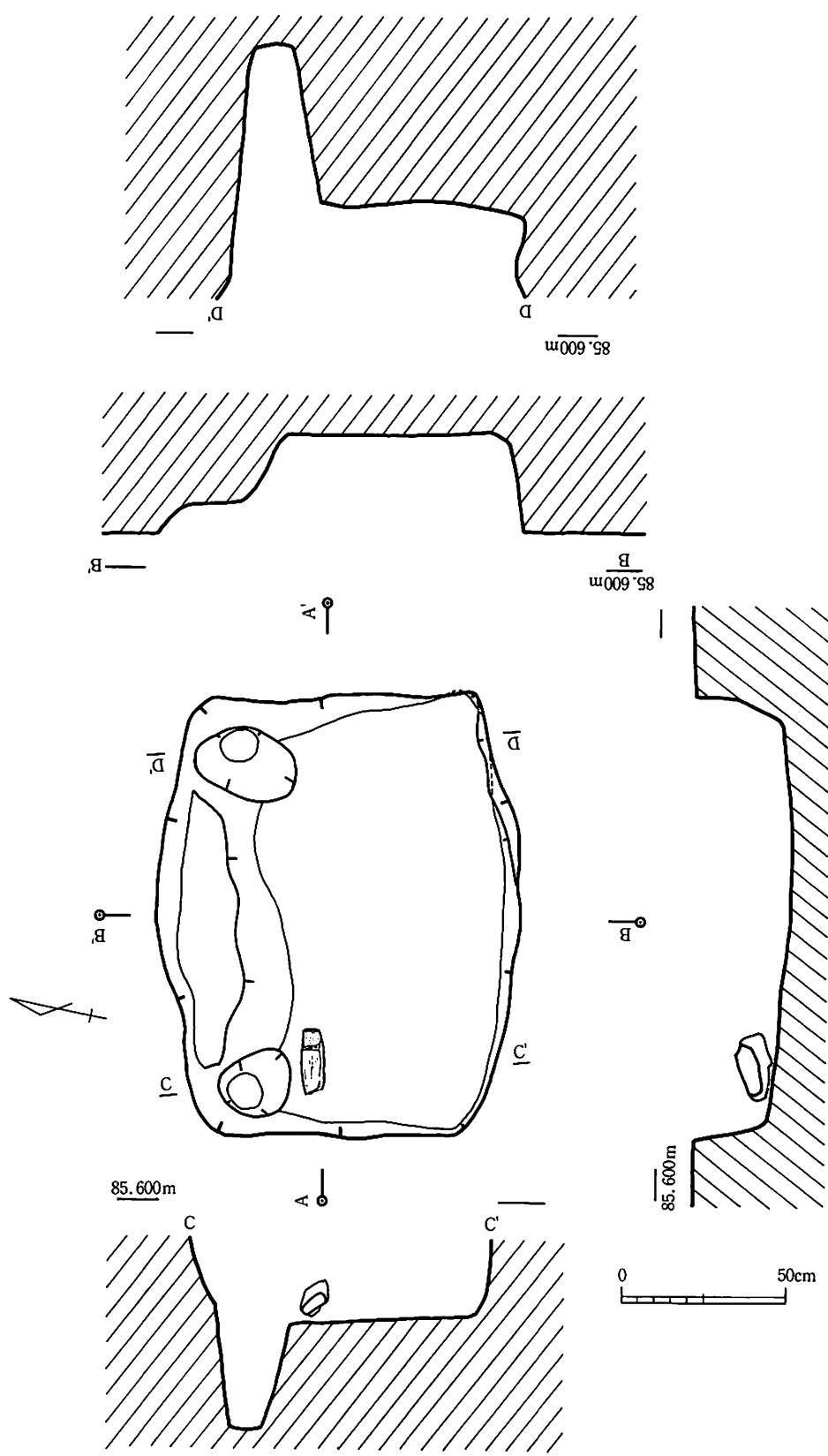
埋没状況

埋土の層序は単層であった。褐色（7.5YR 4/3）を帯びた不均一な土壤である。ややしまり、粘質。2~3mm大の焼土粒・炭化物粒を僅かに含み、黄褐色粘質土塊を混入する。

人為的に埋められた可能性が高い。



第14図 2・3区構造配置



第15図 1号土坑実測図

遺物

遺構内出土の遺物は、実測図に図示した石のほかには土器の細片ばかりで、2点のみ実測し得たが（6・7）、この2点を含めて出土した土器はいずれも縄文期のものである。しかし前述の通り細片であるため流れ込みの可能性も高く、時期の特定は難しい。

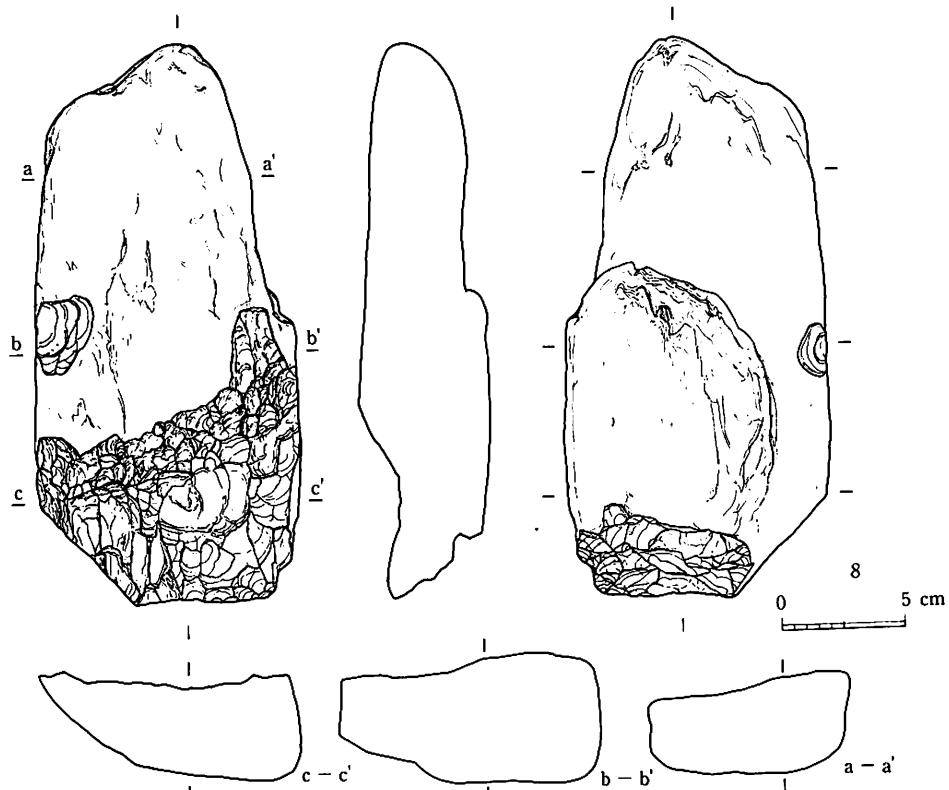
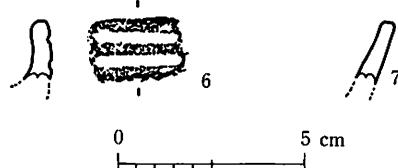
8は変成岩製の正体不明石材である。大型の掘削道具の可能性もあるが、石器の母岩であるとも考えられよう。底部近くからの出土で、遺構に伴うものと見て良かろうが、これもやはり時期特定は難しい。

第6表 1号土坑出土遺物観察表1

No.	出土状況	器形／部位	法量（mm） 口径／底径／器高	色調	胎土	調整	焼成	備考
6	1号土坑半截一括	浅鉢／口縁	破片	外面：褐灰（10YR4/1） 内面：にぶい黄褐（10YR5/3）	白色粒を含む 雲母を僅かに含む 角閃石をごく僅かに含む	外面：ナデ・条痕 内面：ナデ	良好	
7	1号土坑一括	鉢／口縁	破片	外面：褐灰（10YR4/1） 内面：褐灰（10YR4/1）と 黒褐（10YR3/1）の中間	白色粒を含む 雲母を僅かに含む 角閃石を含む	外面：ナデ 内面：ナデ	良好	

第7表 1号土坑出土遺物観察表2

No.	出土状況	器種	石 材	計測値（mm）				備考
				長さ	幅	厚さ	重量（g）	
8	1号土坑 S-1	石器母岩？	変成岩	223	80.5/105/105.5	39/50.5/35	1985	



第16図 1号土坑出土遺物実測図

b. 1号道路

検出当初は溝状遺構ではないかと考えたが、精査の結果遺構内から数層に重なる硬化面を検出、1号道路とした。調査区を斜めに横断しているが、ほぼ東西に沿う形で検出した。220~230cm 幅で、検出面からの深さは50cm 前後におよぶ。若干いびつだが、断面形状は逆台形状である。底部は全面にわたって硬化面が分布しており、スコップでも容易に掘り得ないほど硬くしまっていた。

本遺構は、北側のプランはすぐに検出できたものの、表土を撤去してもバラスが入り込み、また大量の打ち割られた凝灰岩（当初は箱式石棺の部材ではないかと考えたものの、調査の結果割れ口は新しく加工痕も認められなかった）が出土するなど搅乱がひどく、南側プランの検出には時間を要した。

しかし調査の進展に伴ってこれらのバラスや搅乱土が帶状をなしていることが判明し、現代の道路痕跡ではないかという疑問が生じてきたころ、調査区に隣接する畠地の地権者から「この辺り（1号道路付近）には最近まで道路があった」という証言が得られたことで、果たして昭和期の道路痕跡であることが確認できた。

昭和期道路は、1号道路とほぼ同じ方向で、南側へ1mほどずれつつ重複していた。バラス等を撤去したときのプランは立ち上がりの際の部分が溝状にくほんでおり、車の轍の痕跡ではないかと考えられる。

埋没状況（第19図）

底部以外にも数層にわたって硬化面を確認するなど、道路としての利用が頻繁に行われていた上、遺構上面は昭和期道路との重複などにより複雑な層序をなしている。

硬化面は、遺構底部のそれを含めると大きく4層が認められ、繰り返し利用されていたことが想定される。

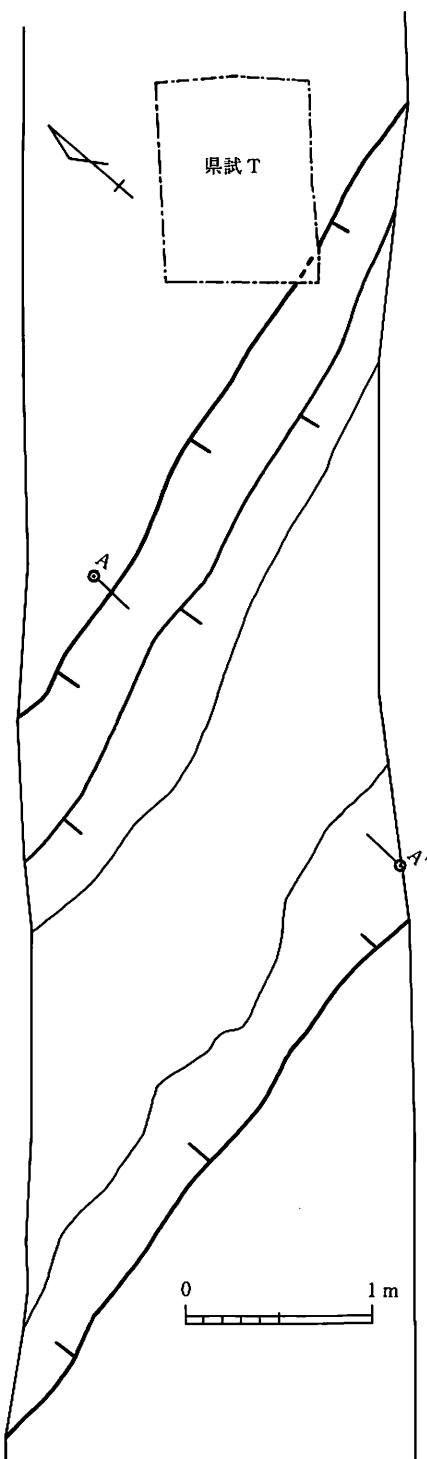
遺物

4点を実測した（9~12）。いずれも陶磁器資料である。遺構図に図示した石は凝灰岩で、加工痕はなく、割れ口も新しかったので実測対象としなかった。

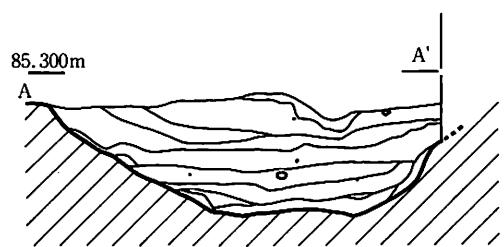
これらのうち9・10は1号道路上面からの出土で、昭和期道路に属すると考えられるが、ここに列挙しておく。また、石器を2点出土しているが（30・31）、流れ込みと判断し遺構外出土遺物とした。

第8表 1号道路出土遺物観察表

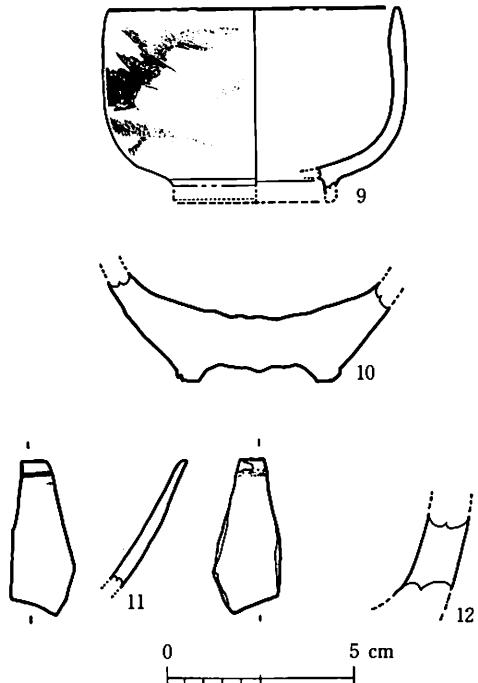
No.	出土状況	器形／部位	法量(mm) 口径／底径／器高	色調	胎土	調整	焼成	備考
9	1号道路上面	碗 色絵磁器	78/41/51.5	外面：灰白(5Y8/1と7/1の中間) 釉：オリーブ黒（7.5Y3/2） ・黒（7.5Y2/1） 内面：灰白(5Y8/1と7/1の中間)	黒色微粒子を僅かに含む	型押し 釉：機械印刷		
10	1号道路上面	碗／底 施釉陶器	破片	外面：にぶい褐（7.5YR5/4） 内面：オリーブ灰（10Y5/2） 釉：オリーブ灰（2.5GY6/1）	白色粒をごく僅かに含む	口クロ引き上げ ヘラ削り高台		外面の一部・内面に釉あり
11	1号道路 トレンチ一括	碗／口縁 染付磁器	破片	外面：灰白（2.5Y8/1） 染付：淡い群青 内面：灰白（2.5Y8/1）	黒色微粒子をごく僅かに含む	型押し		
12	1号道路 トレンチ一括	甕／胴 瓦質土器？	破片	にぶい赤褐（5YR5/4）と 明赤褐（5YR5/6）の中間	雲母微粒子を僅かに含む 角閃石を僅かに含む	不明	軟質	2次焼成を受ける



第17図 1号道路実測図



第18図 1号道路断面図



第19図 1号道路出土遺物実測図

c. 遺構外出土遺物

2区から出土した遺物のうち、実測に堪え得るものは土器8点(13~20)・石器11点(21~31)の計19点である。

土器

1区同様小片がほとんどで、法量の一部を推定した資料は僅かに1点のみであった(18)。

部位は口縁部が6点を占め(13~18)、ほかは胴部1(19)、底部1(20)である。全調査区を通し、今次調査における底部資料としてはこれが唯一のものである。

石器

打製石斧群は3点実測した(21~23)。いずれの資料も一部または大半を欠損しており、良好な資料はない。

磨製石斧は1点実測した(24)。今次調査における唯一の資料であるが、状態はきわめて悪い。

磨石・敲石は4点を実測した(25~28)。今次調査における資料はいずれも磨り跡と敲打痕と双方の痕跡をとどめており、これら両者を明確に区別することは出来ないためあえて両者を区別せず、磨石・敲石とした。

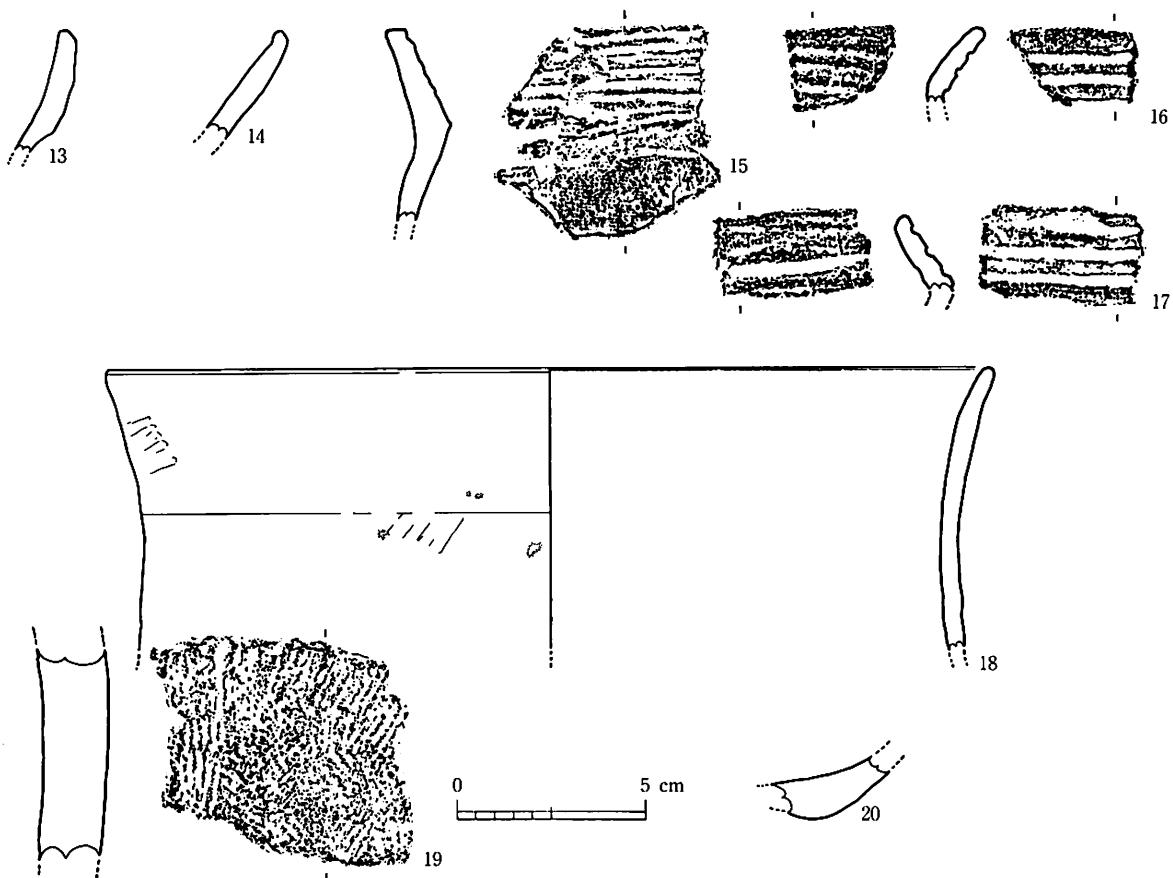
他の石器は1点実測した(29)。明瞭な加工痕に乏しく、何かの台座として用いられたと考えられる。黒曜石資料は2点を実測した(30・31)。

第9表 2区遺構外出土遺物観察表1

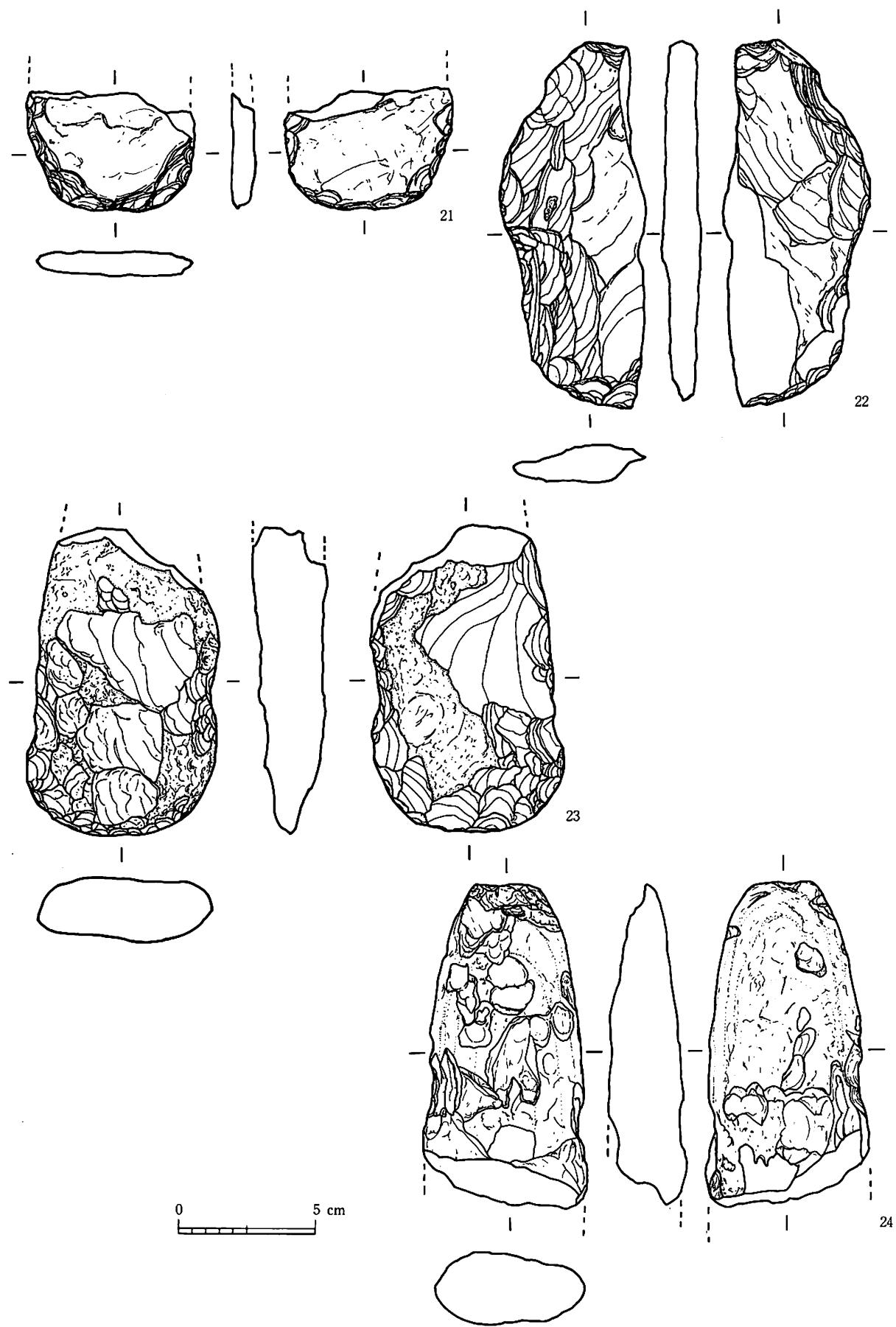
No.	出土状況	器形/部位	法量(mm) 口径/底径/器高	色調	胎土	調整	焼成	備考
13	2区表土剥ぎ一括	浅鉢/口縁	破片	外面:にぶい黄橙(10YR6/4) 黒斑:褐灰(10YR4/1) 内面:にぶい黄橙(10YR7/4) ・黄灰(2.5Y6/1)	白色粒をわずかに含む 雲母を含む 角閃石をわずかに含む	外面:ヘラ・ナデ 内面:ナデ	堅緻	
14	2区表土剥ぎ一括	浅鉢/口縁	破片	外面:黄灰(2.5Y4/1) 内面:黄灰(2.5Y4/1)	白色粒をやや多量に含む 雲母をやや多量に含む 角閃石をごく僅かに含む	両面ナデ	良好	黒色土器
15	2区一括	鉢/口縁	破片	外面:にぶい褐(7.5YR5/4) 内面:にぶい黄褐(10YR5/4)	白色粒を含む 雲母をわずかに含む 角閃石をごく僅かに含む	外面:ナデ・条痕 内面:ナデ	堅緻	2重口縁の貼付部
16	2区最北部一括	浅鉢?/口縁	破片	外面:灰黄褐(10YR4/2) 内面:にぶい褐(7.5YR5/4)	白色粒を多量に含む 雲母をやや多量に含む 角閃石を僅かに含む	外面:ナデ・条痕 内面:ナデ	良好	
17	2区最北部一括	深鉢/口縁	破片	外面:にぶい黄褐(10YR5/4) 内面:にぶい黄褐(10YR5/3)	白色粒を多量に含む 雲母を含む 角閃石を僅かに含む	外面:ナデ・条痕 内面:ヘラ+ナデ	良好	
18	2-A深掘り部一括	甕/口縁	236/-/-	外面:オリーブ褐(2.5Y4/4) 内面:オリーブ褐(2.5Y4/3)	白色微粒子を多量に含む 雲母を多量に含む 角閃石をごく僅かに含む	外面:ハケ+ナデ? 内面:ナデ?	軟質	外面に煤付着
19	2区北部一括	大甕/胴	破片	外面:にぶい黄褐(10YR5/4) 内面:にぶい黄橙(10YR6/4)	白色粒を含む 雲母を含む 角閃石をやや多量に含む	両面ハケ	良好	
20	2区表土剥ぎ一括	鉢?/底	破片	外面:にぶい黄橙(10YR6/4) 内面:にぶい黄橙(10YR6/4)	白色粒を多量に含む 雲母を多量に含む 角閃石を多量に含む	両面ナデ	良好	脚台なし

第10表 2区造構外出土遺物観察表2

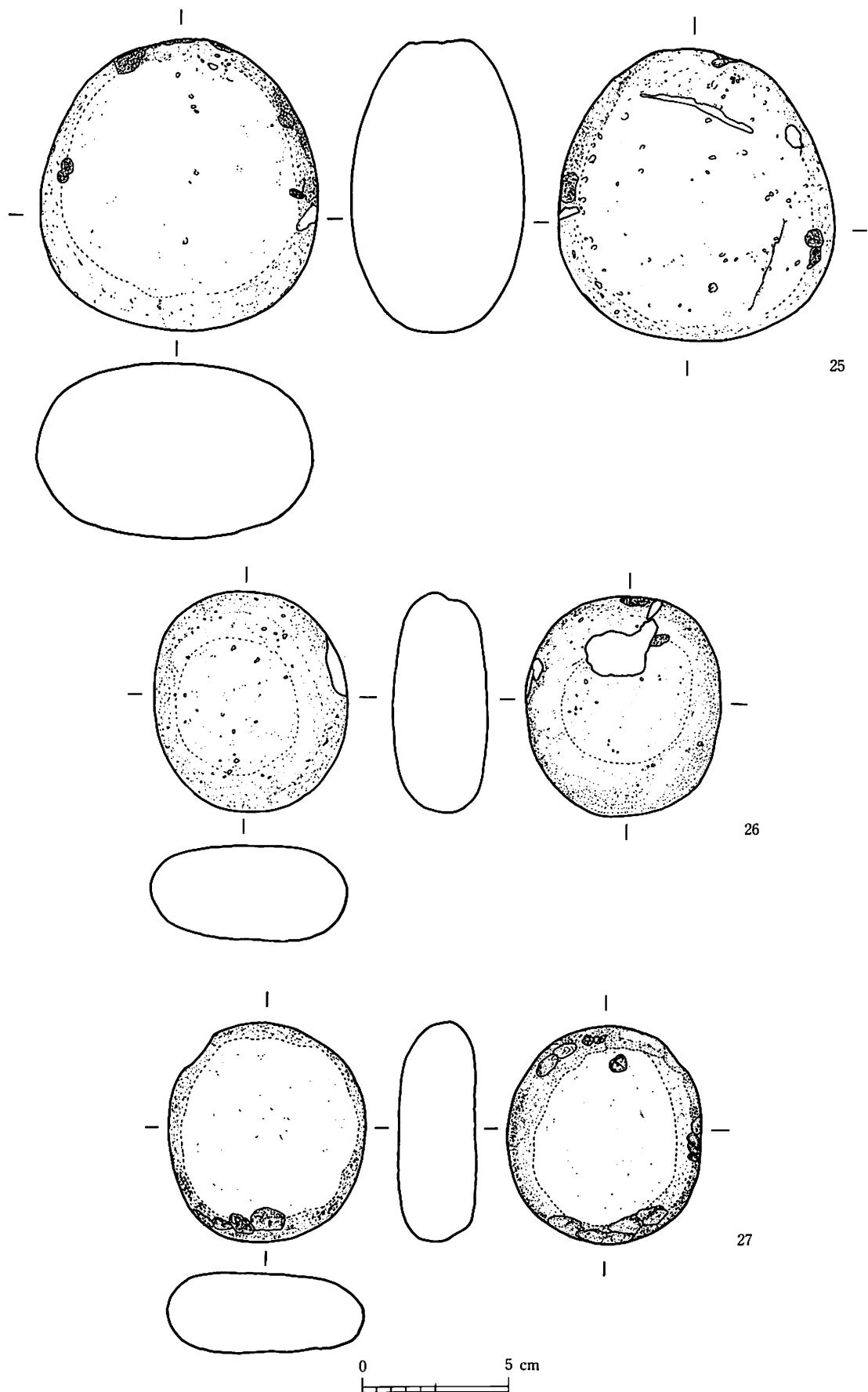
No.	出土状況	器種	石材	計測値 (mm)				備考
				長さ	幅	厚さ	重量 (g)	
21	2区表土剥ぎ一括	打製石斧	變成岩	129	(48)	13.5	(121)	一部欠損
22	2区表土剥ぎ一括	打製石斧	變成岩	(41.5)	56	9	(39.5)	刃部のみ
23	2区南部一括	打製石斧	花崗岩	(110)	63	22	(288)	基部欠損
24	1号道路下層一括	磨製石斧	蛇紋岩	(115.5)	53.5	24.5	(250)	刃部欠損
25	2区最南部一括	磨石・敲石	安山岩	98.5	92.5	58.5	805	
26	2区表土剥ぎ一括	磨石・敲石	安山岩	73.5	66	32	254	
27	1号道路上層一括	磨石・敲石	砂岩	74.5	66.5	26.5	206	
28	D (S-3)	磨石・敲石	變成岩	152.5	26/26.5	16/16	117	
29	2区北部一括	台石?	安山岩	164.5	114	31.5	1530	
30	1号道路 トレンチ一括	不定形剥片	黒耀石	19.5	17	4.5	3	
31	2区北部一括	2次加工石器	黒耀石	31.5	19	5.5	4.5	



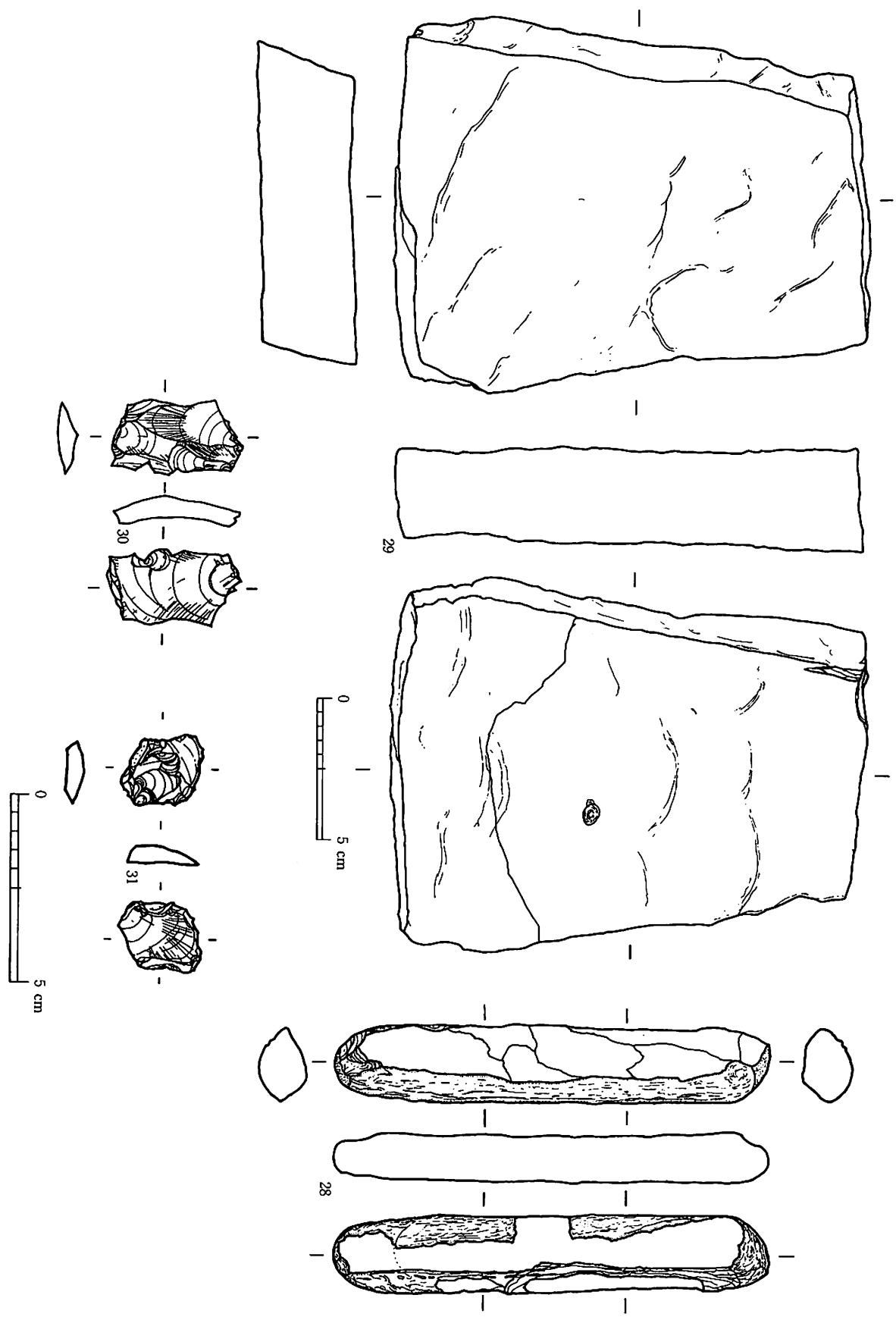
第20図 2区造構外出土遺物実測図1



第21図 2区造構外出土遺物実測図 2



第22図 2区造構外出土遺物実測図 3



第23図 2区造構外出土遺物実測図 4

3-5 3区の調査成果

もっとも狭い調査区である。高低差はほとんどなく平坦な地形であったが、30~50cmにおよぶ現耕作土層の下に旧耕作土層が20~30cmにわたって堆積し、包含層をほとんど確認出来なかったことから、かなりの割合で削平を受けていると考えられる。最終的に遺構は確認できなかったが、開田工事の際に埋設された昭和期の配水管を検出した（第14図）。

基本層序

配水管埋設に伴う層序を除き、2区と同様である。



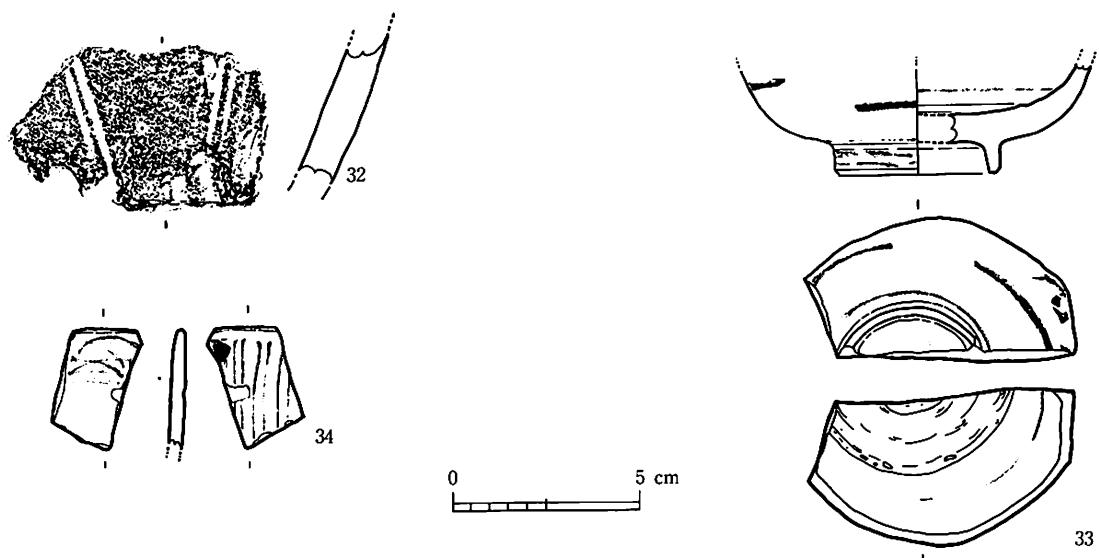
第24図 3区基本層序図

a. 遺構外出土遺物

3区出土の遺物は数点しかなく、いずれも破片～小片で、縄文期の遺物は皆無であった。3点を実測した（32~34）。

第11表 3区出土遺物観察表

No.	出土状況	器形／部位	法量 (mm) 口径／底径／器高	色調	胎土	調整	焼成	備考
32	3区一括	擂鉢／胴 瓦質土器	破片	外面：橙（5YR6/6） ・にぶい黄橙（10YR6/3） 内面：灰黄褐（10YR5/2）	雲母微粒子を含む	不明	不明	2次焼成を受ける
33	3区表土剥ぎ一括	碗／底 染付磁器	-/42/8 (台高)	器面：灰白（5GY8/1） 染付：コバルト	黒色微粒子を僅かに含む	型押し 高台は面取り		蛇の目釉剥ぎ
34	3区表土剥ぎ一括	碗／口縁 染付磁器	破片	器面：灰白（5GY8/1） 染付：くすんだ群青	黒色微粒子を僅かに含む	型押し		



第25図 3区出土遺物実測図

3 - 6 調査区周辺の参考資料

a. H15調査区外出土遺物

1 - A 区北、仮設道路の降り口付近から発見された一連の土器片は、調査区外出土遺物ではあるが、今次調査における唯一の接合資料となったことから、ここで挙げておく。

調査後半の1月28日、工事車輌用の仮設道路構築に際し、工事業者が発掘調査現場事務所の脇を盛土のため重機で掘削したが(PL14上)、その際に出た排土の残土から大量の縄文土器片を認めた。類似した外観や新しい割れ口から、接合資料の可能性があるということで可能なかぎり回収すると同時に、遺構検出の可能性を考慮して周辺の掘削面などを精査してみたが、遺構らしきものは確認できなかった。

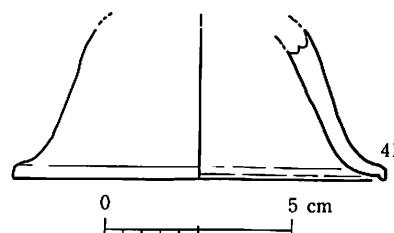
回収した時点で、頸部付近につくりボン状の突起を確認しており、当初は同一個体であろうと想定していたが、調査終了後の整理作業の結果、縄文期の甕3・浅鉢3の計3個体分となることが判明した(35~40)。

このうち36・37については同一個体と目されるが、波状をなす口縁の隆起部とリボン状凸起との位置関係に若干のずれがあるなど、別個体の可能性もあるため、ここではそれぞれ別個に取り扱った。

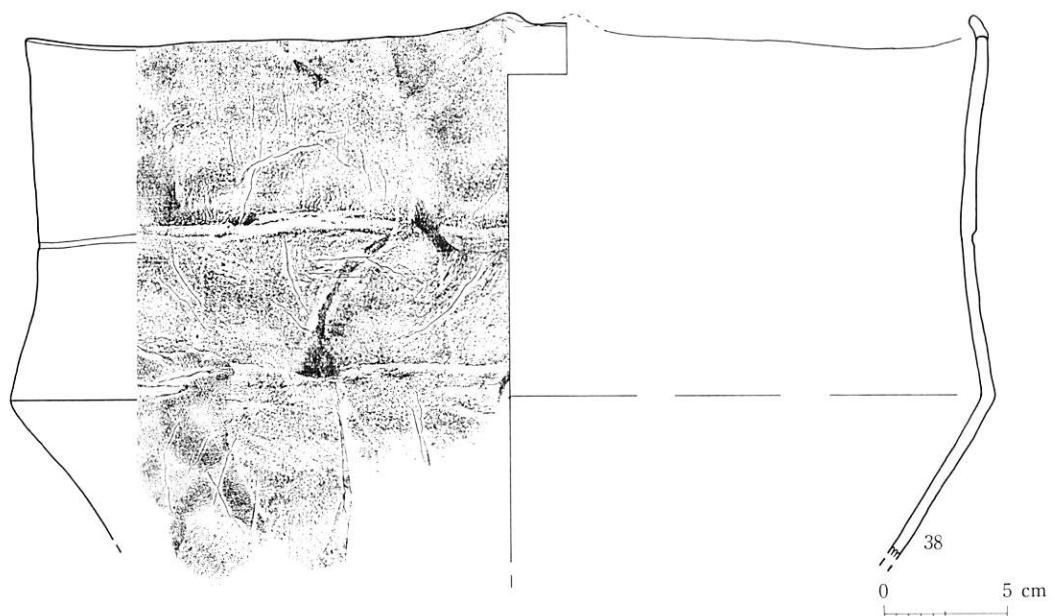
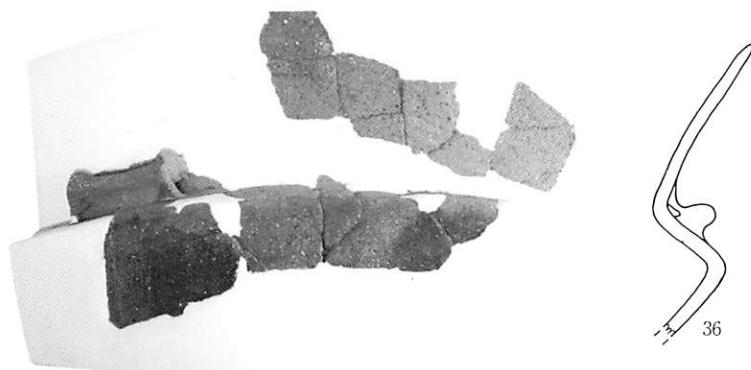
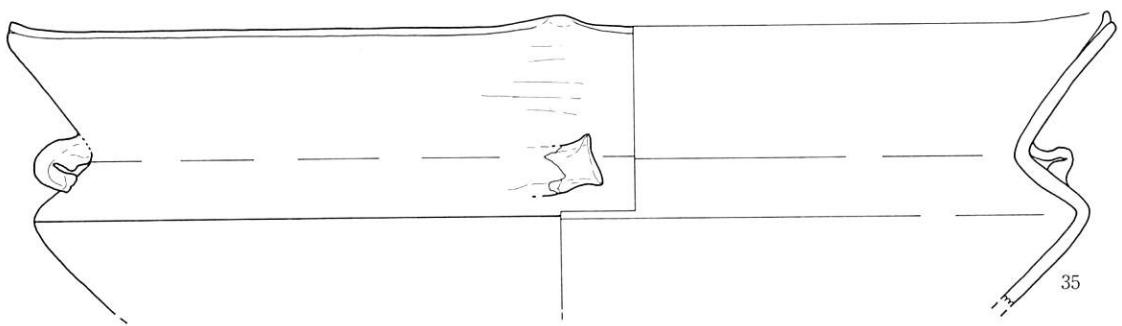
41は、調査区西隣に敷設された工事用仮設道路の予定地内において、I層土が除去された状態で発見した。須恵器の高坏脚部である。器面には欠損が多く、耕作による瑕瑾と考えられる。

第12表 H15調査区外出土遺物観察表

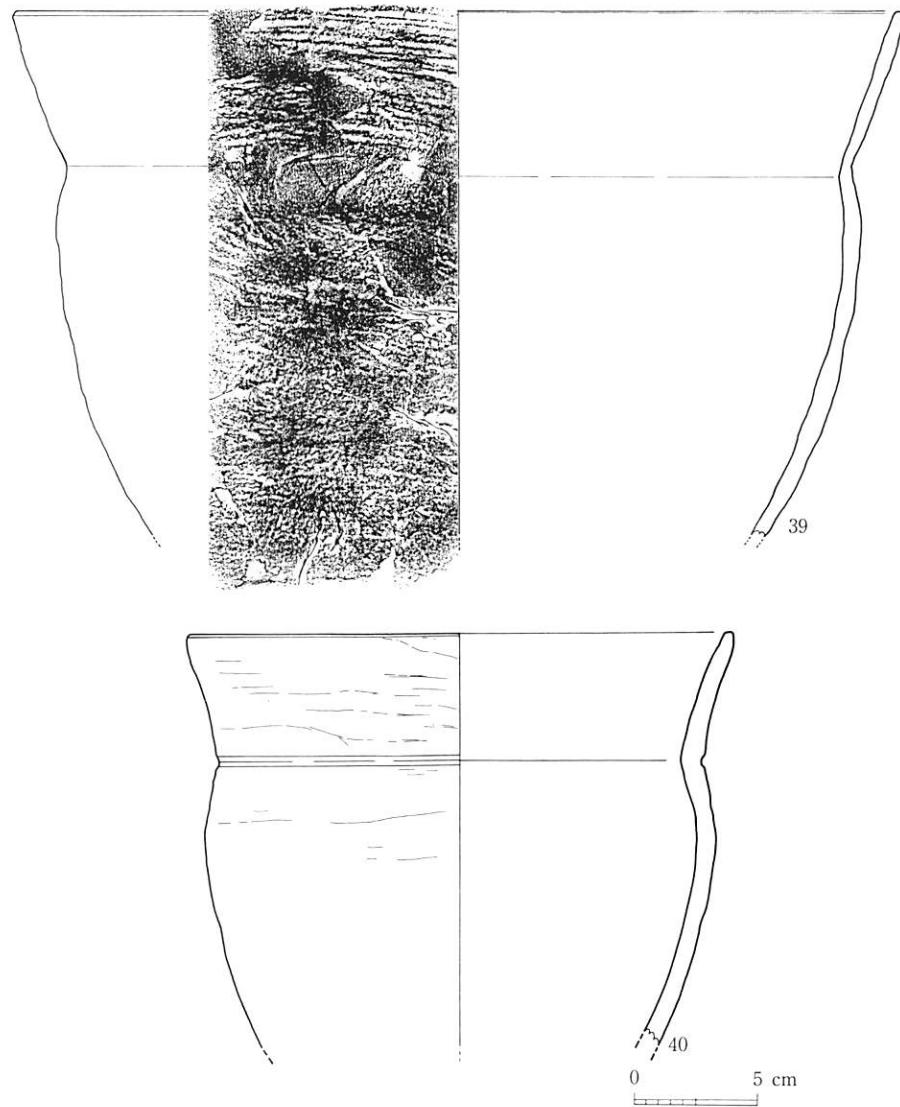
No.	出土状況	器形／部位	法量 (mm) 口径／底径／器高	色 調	胎 上	調 整	焼 成	備 考
35	調査区外 (1-A区北)	浅鉢／口縁～胴	450/427 (胴) /- ※反転復元	外面：にぶい橙(7.5YR6/4) ・灰褐(7.5YR5/2) 黒斑：黒褐(7.5YR3/1) 内面：灰黄褐(10YR4/2) ・にぶい黄橙(10YR6/4) 黒斑：黒褐(10YR3/1)	鉄分を含む胎土 白色粒を含む 雲母を含む 角閃石を含む	外面：ヘラ 内面：不明	良好	外面に煤あり
36	調査区外 (1-A区北)	浅鉢／口縁～胴	破片	外面：にぶい橙(7.5YR6/4) ・にぶい黄橙(10YR6/3) 内面：橙(7.5YR6/6)	鉄分を含む胎土 白色粒を含む 雲母を含む 角閃石を含む	不明	良好	外面に煤あり
37	調査区外 (1-A区北)	浅鉢／口縁～胴	破片	外面：にぶい橙(7.5YR7/4) ・にぶい褐(7.5YR6/3) 内面：橙(7.5YR7/6) ・にぶい黄橙(10YR7/4) 黒斑：黒(N2/0)	鉄分を含む胎土 白色粒を含む 雲母を含む	両面ヘラ	良好	外面に煤あり
38	調査区外 (1-A区北)	深鉢／口縁～胴	388.5/394 (胴) /- ※反転復元	外面：にぶい橙(7.5YR6/4) ・にぶい黄橙(7.5YR6/4) 内面：にぶい橙(7.5YR6/4)	鉄分を含む胎土 白色粒を含む 雲母を含む 角閃石を含む	外面：ヘラ 頸部に沈線 内面：ヘラ	良好	外面に煤あり
39	調査区外 (1-A区北)	甕／口縁～胴	360/326 (胴) /- ※反転復元	外面：灰黄褐(10YR4/2) 黒斑：黒褐(10YR3/1) 内面：にぶい黄褐(10YR5/3)	白色粒を含む 雲母を多量に含む 角閃石を僅かに含む	外面：強いハケ 内面：ハケ	良好	
40	調査区外 (1-A区北)	深鉢／口縁～胴	218/206 (胴) /- ※反転復元	外面：にぶい褐(7.5YR5/3) 黒斑：暗灰(N3/0) 内面：にぶい橙(7.5YR6/4) ・黒褐(7.5YR3/1)	鉄分を含む胎土 白色粒を含む 角閃石を含む	両面ヘラ	良好	外面に煤あり
41	1区西隣仮設道路区内	高坏／脚 須恵器	-/-/99 ※反転復元	器面：灰(5Y6/1) 釉：暗灰黄(2.5Y5/2)	鉄分を噴出する	成形：水引き	良好	外面に施釉



第26図 H15調査区外出土遺物実測図1



第27図 H15調査区外出土遺物実測図 2



第28図 H15調査区外出土遺物実測図 3

b. 西原遺跡出土遺物

西原遺跡の調査経緯等についてはすでに触れたところであるが、ここにその出土遺物を挙げておく。

今回実測したのは、土器36・石器17の計53点である。

これらは、縄文土器・弥生土器・石器・歴史時代土器の4種に大別される。

縄文土器 (42~67)

縄文土器は精製浅鉢群 (42~49)、粗製深鉢群 (50~56)、大型のカメ群 (57~67) とに大別される。

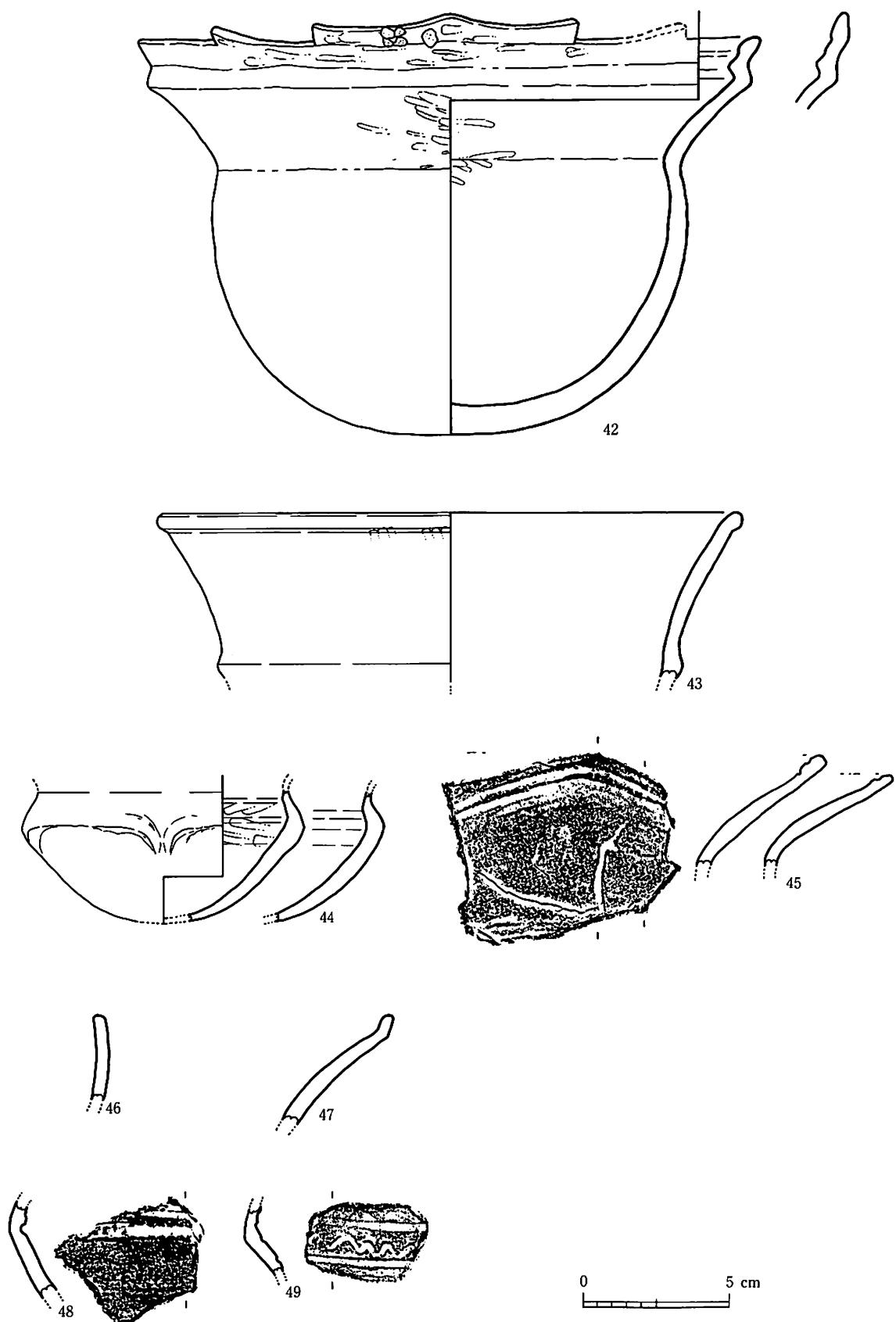
精製浅鉢群は丁寧なミガキ調整を施すものが多く、装飾では磨消縄文は見られず、沈線 (45・49) や連続押捺沈線 (48) などシンプルである。

粗製深鉢群は、口縁部に意図的な沈線を施したもの (50・52) と横方向への強いハケ調整痕を残すもの (51・53) の外に、口唇部が肥厚した一群 (54~56) が存在する。

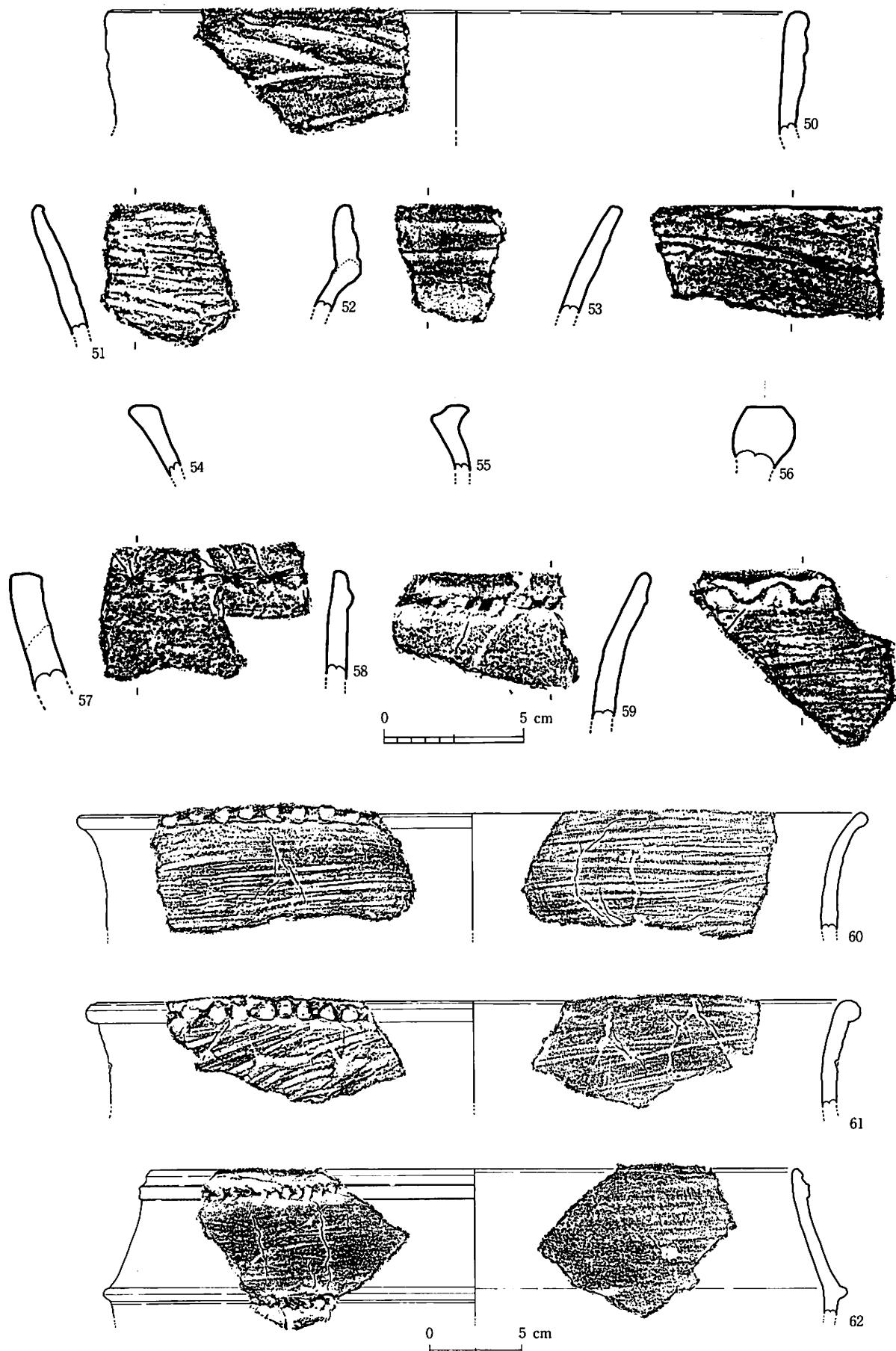
大型のカメ群は、口縁部に刻みを施したもの (57~62) とそうでないもの (63・64) とがある。

第13表 西原遺跡出土遺物観察表1

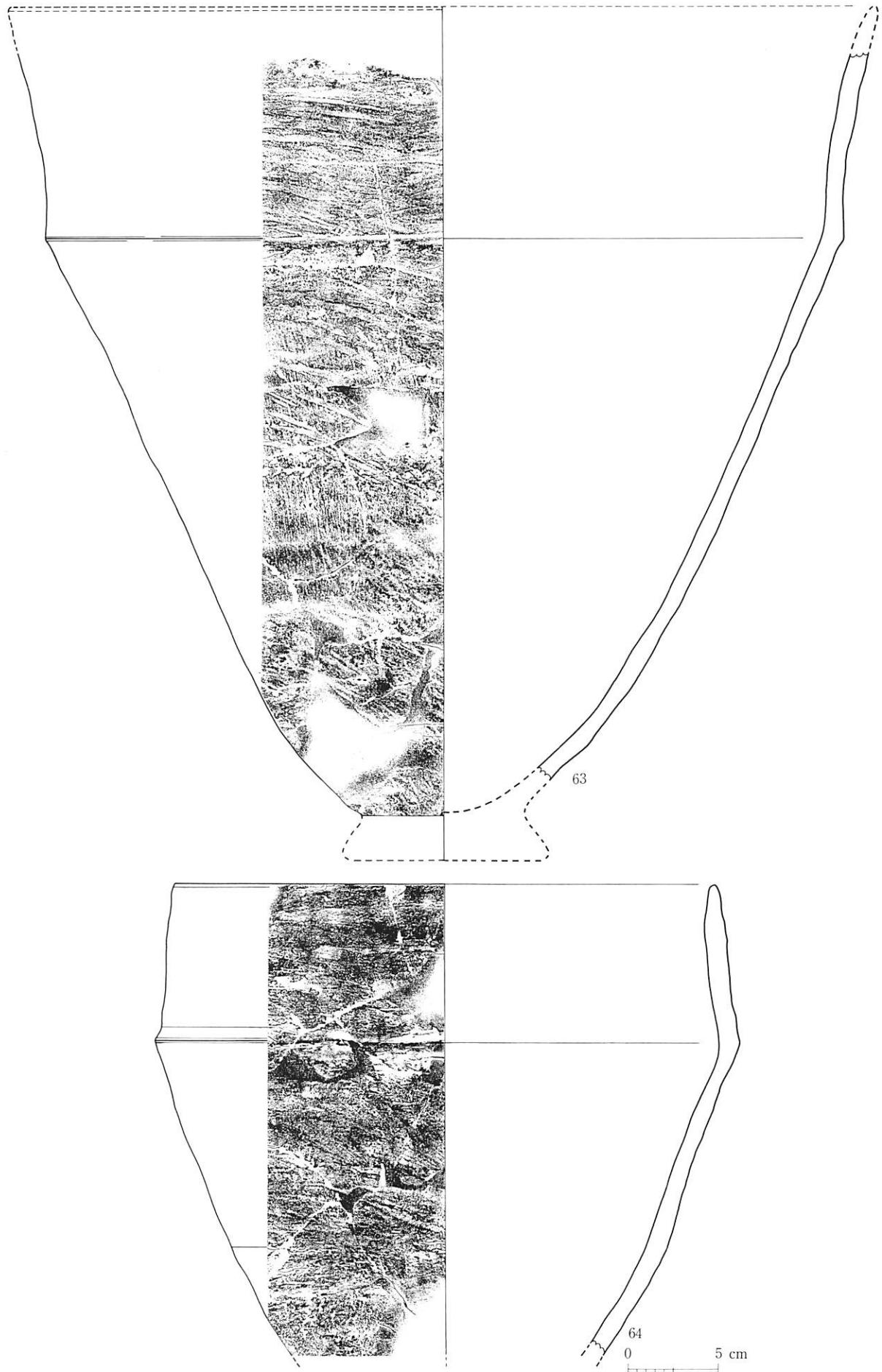
No.	出土状況	器形 / 部位	法量(mm) 口径 / 底径 / 器高	色 調	胎 土	調 整	焼 成	備 考
42		浅鉢	212/162(胴) /134(142) ()は凸起を含む	外面:オリーブ黒(5Y3/2) 黒斑:オリーブ黒(10Y3/1) 内面:オリーブ黒(7.5Y3/1) ・オリーブ黒(5Y3/2)	不明	両面ミガキ	良好	山鹿市博展示資料
43	カメ棺III号	浅鉢 / 口縁	199/-/- ※反転復元	外面:にぶい黄褐(10YR5/3) 内面:暗灰黄(2.5Y4/2)	白色粒をきわめて多量に含む 雲母を含む	両面ハケ+ナデ	良好	
44	表採	浅鉢 / 胴	-/96(胴) /- ※反転復元	外面:黄褐(2.5Y5/3) 内面:灰(5Y5/1)と 灰オリーブ(5Y5/2)の中間	白色粒を含む 雲母微粒子を僅かに含む 角閃石をごく僅かに含む	両面ミガキ+ナデ	堅緻	
45	表採	浅鉢 / 口縁	破片	外面:にぶい黄(2.5Y6/3) ・灰(5Y4/1) 内面:にぶい黄褐(10YR6/4) ・褐灰(10YR4/1)	白色粒を僅かに含む 雲母微粒子を含む 角閃石をやや含む	外面:ハケ+ナデ 内面:ミガキ	良好	
46	表採	浅鉢 / 口縁	破片	外面:黄褐(2.5Y5/3) 内面:黄灰(2.5Y5/1と 4/1の中間)	精練された胎土 白色微粒子をごく僅かに含む 雲母を含む	外面:ハケ 内面:ミガキ	良好	
47	表採	浅鉢 / 口縁	破片	外面:にぶい黄(2.5Y6/3) 内面:暗灰黄(2.5Y5/2)	精練された胎土 白色微粒子を僅かに含む 雲母を含む	両面ミガキ	やや軟質	
48	カメ棺	浅鉢? / 頸	破片	外面:灰(5Y4/1)と オリーブ黒(5Y4/2)の中間 内面:灰(5Y4/1) ・にぶい褐(7.5YR5/4)	白色粒を含む 雲母微粒子を含む 角閃石をごく僅かに含む	両面ミガキ	良好	連続押捺沈線
49	カメ棺	浅鉢? / 頸	破片	両面にぶい黄橙(10YR5/3)	白色粒を僅かに含む 角閃石を含む	両面ミガキ	堅緻	波状沈線文
50	カメ棺III号	甕 / 口縁	251/-/- ※反転復元	外面:灰黄褐(10YR5/2) 内面:にぶい褐(7.5YR5/4)	白色粒を多量に含む 雲母を多量に含む	外面:ハケ+ナデ 内面:ハケ+ナデ	良好	
51	表採	深鉢 / 口縁	破片	外面:灰(5Y4/1) 内面:暗灰黄(2.5Y5/2)	白色粒を僅かに含む 雲母を含む 角閃石をごく僅かに含む	外面:強いハケ 内面:ハケ・ナデ	堅緻	
52	表採	深鉢 / 口縁	破片	外面:黄灰(2.5Y6/2と 4/1の中間) ・にぶい黄(2.5Y6/3)と 黄褐(2.5Y6/3)の中間 内面:灰黄(2.5Y6/2)と にぶい黄(2.5Y6/3)の中間	白色粒を含む 雲母を含む 角閃石をごく僅かに含む	両面とも粗いミガキ or 丁寧なハケ	良好	
53	表採	甕 / 口縁	破片	外面:灰(5Y4/1)と オリーブ黒(5Y3/1)の中間 内面:灰(5Y4/0)と 暗灰(N3/0)の中間	白色粒を含む 褐色粒をごく僅かに含む 雲母を含む 角閃石をごく僅かに含む	外面:強いハケ 内面:ミガキ	堅緻	
54	表採	深鉢 / 口縁	破片	両面にぶい褐(7.5YR5/4)	白色粒を含む 雲母微粒子をごく僅かに含む 角閃石を僅かに含む	両面ミガキ	良好	
55	表採	甕 / 口縁	破片	両面オリーブ黒(10YR3/1)	白色微粒子を含む	両面ミガキ	良好	合口?
56	表採	甕 / 口縁	破片	外面:灰(7.5Y4/1) 内面:にぶい黄橙(10YR6/3)	白色微粒子をごく僅かに含む 雲母を僅かに含む 角閃石をごく僅かに含む	両面ハケ	良好	合口
57	カメ棺	甕 / 口縁	破片	両面にぶい黄橙(10YR5/3)	白色粒を含む 雲母を多量に含む	両面ハケ	やや軟質	刻み目文
58	カメ棺	甕 / 口縁	破片	外面:にぶい黄褐(10YR5/4) 内面:にぶい黄橙(10YR6/4)	白色粒を含む 角閃石をごく僅かに含む	両面不明	軟質	刻み目凸帯
59	合口カメ棺	甕 / 口縁	破片	外面:にぶい黄(2.5Y6/3) ・黄灰(2.5Y4/1) 内面:オリーブ黒(5Y3/1)	白色粒を含む 雲母微粒子を僅かに含む 角閃石を僅かに含む	両面ハケ	良好	波状文?
60	合口カメ棺	甕 / 口縁	426/-/- ※反転復元	外面:浅黄(2.5Y7/3) 内面:暗灰(N3/0)	白色粒を含む 褐色粒を僅かに含む 角閃石を含む	両面ハケ	良好	押捺凸帯
61	カメ棺	甕 / 口縁	396/-/- ※反転復元	外面:にぶい黄橙(10YR6/4) 内面:オリーブ黒(5Y3/1)	白色粒を含む 雲母微粒子をごく僅かに含む 角閃石を僅かに含む	外面:強いハケ 内面:ハケ	堅緻	押捺凸帯
62	カメ棺	甕 / 口縁	246/-/- ※反転復元	外面:にぶい黄橙(10YR6/4) 内面:灰(5Y4/1)	白色粒を含む 雲母を多量に含む 角閃石をごく僅かに含む	両面ハケ	良好	刻み目二重凸帯



第29図 西原遺跡出土遺物実測図 1



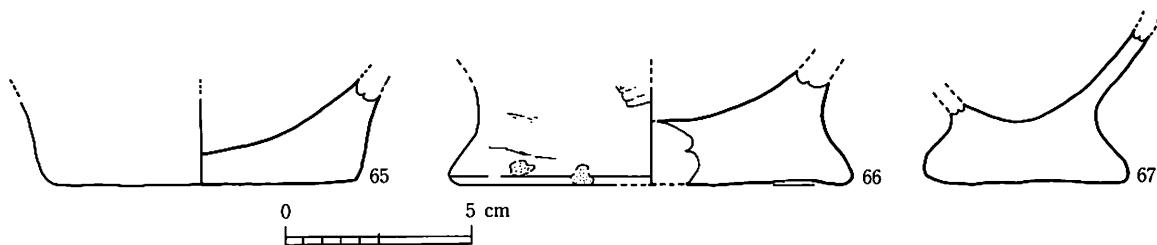
第30図 西原遺跡出土遺物実測図 2



第31図 西原遺跡出土遺物実測図 3

第14表 西原遺跡出土遺物観察表2

No.	出土状況	器形 / 部位	法量 (mm) 口径 / 底径 / 器高	色調	胎土	調整	焼成	備考
63	カメ棺I号下	甕	(470/480/112) ※接合復元	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) ・にぶい橙 (5YR7/4) ・黒褐 (5YR3/1) 内面：青黒 (5PB2/1) ・褐灰 (10YR6/1) ・灰黄褐 (10YR6/2) ・黒 (7.5YR1.7/1)	鉄分を含む胎土 白色粒を含む 黒色粒を含む 雲母を含む 角閃石を含む	外面：ヘラ 内面：不明	良好	両面に煤あり 外面に2次焼成あり (胴部下)
64	カメ棺II号	甕 / 口縁～胴	296/324/- ※接合復元	外面：黒褐 (5YR2/1) ・灰褐 (5YR4/2) ・明褐灰 (7.5YR7/2) ・にぶい赤褐 (5YR5/4) ・灰 (N5/0) 内面：黒 (N2/0) ・灰褐 (7.5YR6/2)	鉄分を含む胎土 白色粒を含む 雲母を含む	外面：ヘラ+ハケ 内面：不明	良好	外面に煤あり
65	カメ棺	甕 / 底	-/84/- ※反転復元	外面：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内面：にぶい黄 (2.5Y6/3)	白色粒を含む 雲母をごく僅かに含む 角閃石を僅かに含む	両面ナデ	良好	平底
66	表採	甕 / 底	-/104/17 (台) ※反転復元	外面：にぶい黄橙 (10YR6/3) 内面：灰黄褐 (10YR6/2)	白色粒を含む 褐色粒を僅かに含む 雲母を含む 角閃石をごく僅かに含む	両面ハケ	堅緻	
67	カメ棺III号	甕 / 底	-/52.5/16.5(台)	外面：褐 (7.5YR4/4) 内面：にぶい黄褐 (10YR5/4)	白色粒をきわめて多量に含む 雲母を含む	両面ハケ	良好	



第32図 西原遺跡出土遺物実測図4

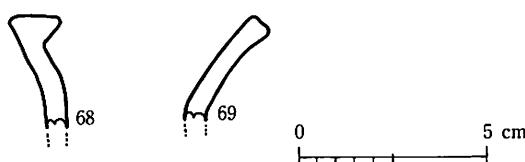
弥生土器 (68・69)

2点を実測した。いずれも甕の口縁部破片で、法量は不明である。

68は口縁部が肥厚しており、鋤先状をなしている。

第15表 西原遺跡出土遺物観察表3

No.	出土状況	器形 / 部位	法量 (mm) 口径 / 底径 / 器高	色調	胎土	調整	焼成	備考
68	表採	甕 / 口縁 弥生土器	破片	外面：にぶい黄 (2.5Y6/3) 内面：暗灰黄 (2.5Y5/2)	白色粒を僅かに含む 褐色粒を含む 雲母を含む 角閃石を含む	両面ハケ+ナデ	良好	鋤先口縁
69	表採	甕 / 口縁 弥生土器	破片	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/4)	白色粒をごく僅かに含む	外面：ミガキ 内面：ハケ	良好	



第33図 西原遺跡出土遺物実測図5

石器 (70~86)

鍋田西原遺跡における石器は、すべて表採という形で取り上げられている。それらの総数は100点を超えるが、今回はその中から17点について図化した。

これらを以下の通りに分類した。なお、分類については江本直氏の指導に拠っている。

石鎌 (70)

1点のみの出土である。裏面を大きく剥離している。

打製石斧類 (71~76)

1点のみ出土している有肩打斧（異形石器）を含め、6点を実測した。このうち、長さが判明しているのは1点のみと、各遺物の遺存状況は良好とは言いがたい。

磨製石斧 (77)

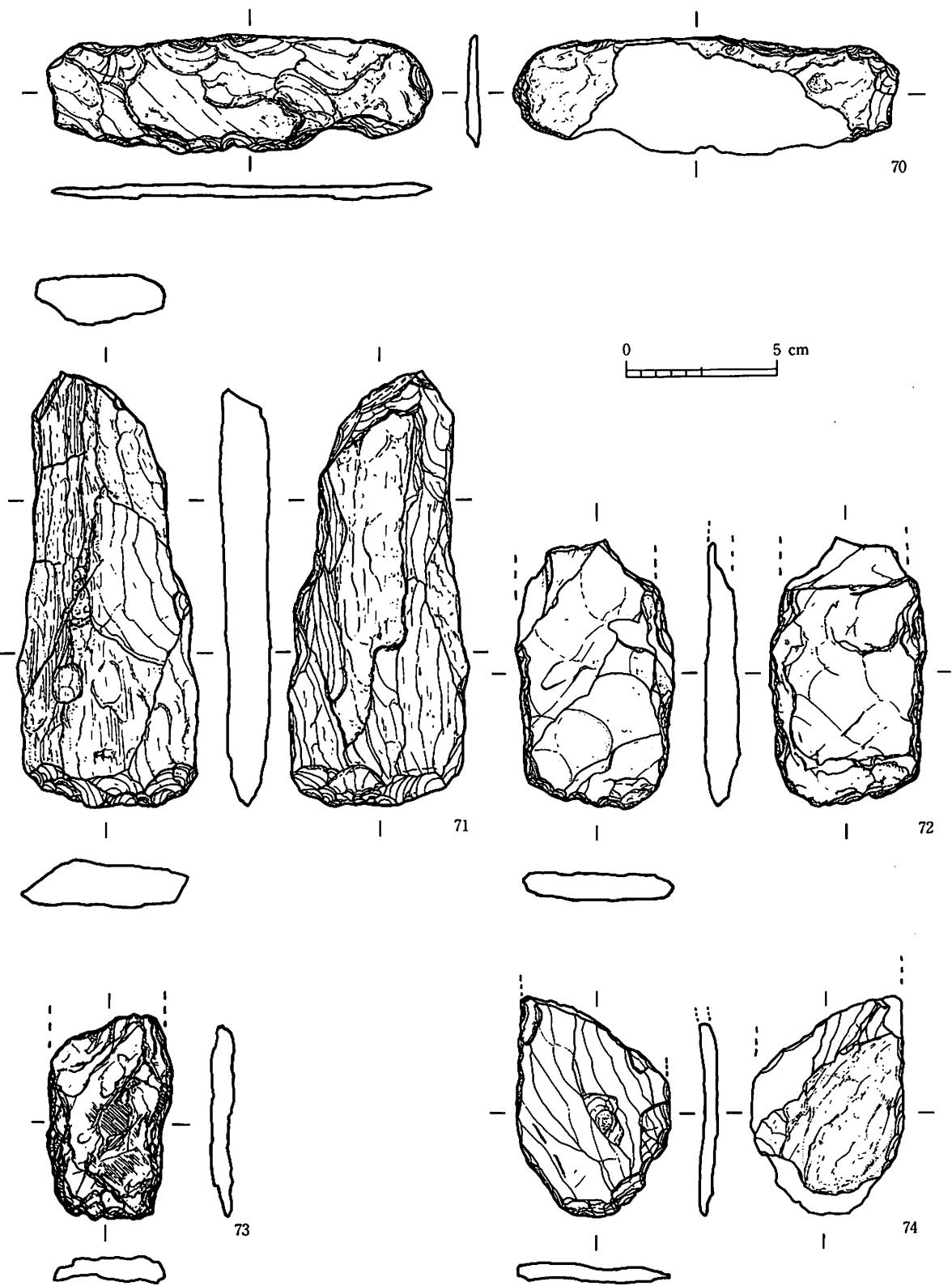
1点のみ確認しているが、刃部を欠損している上に剥離が著しく、調整痕・使用痕などは不明瞭である。

黒曜石・サヌカイト系資料

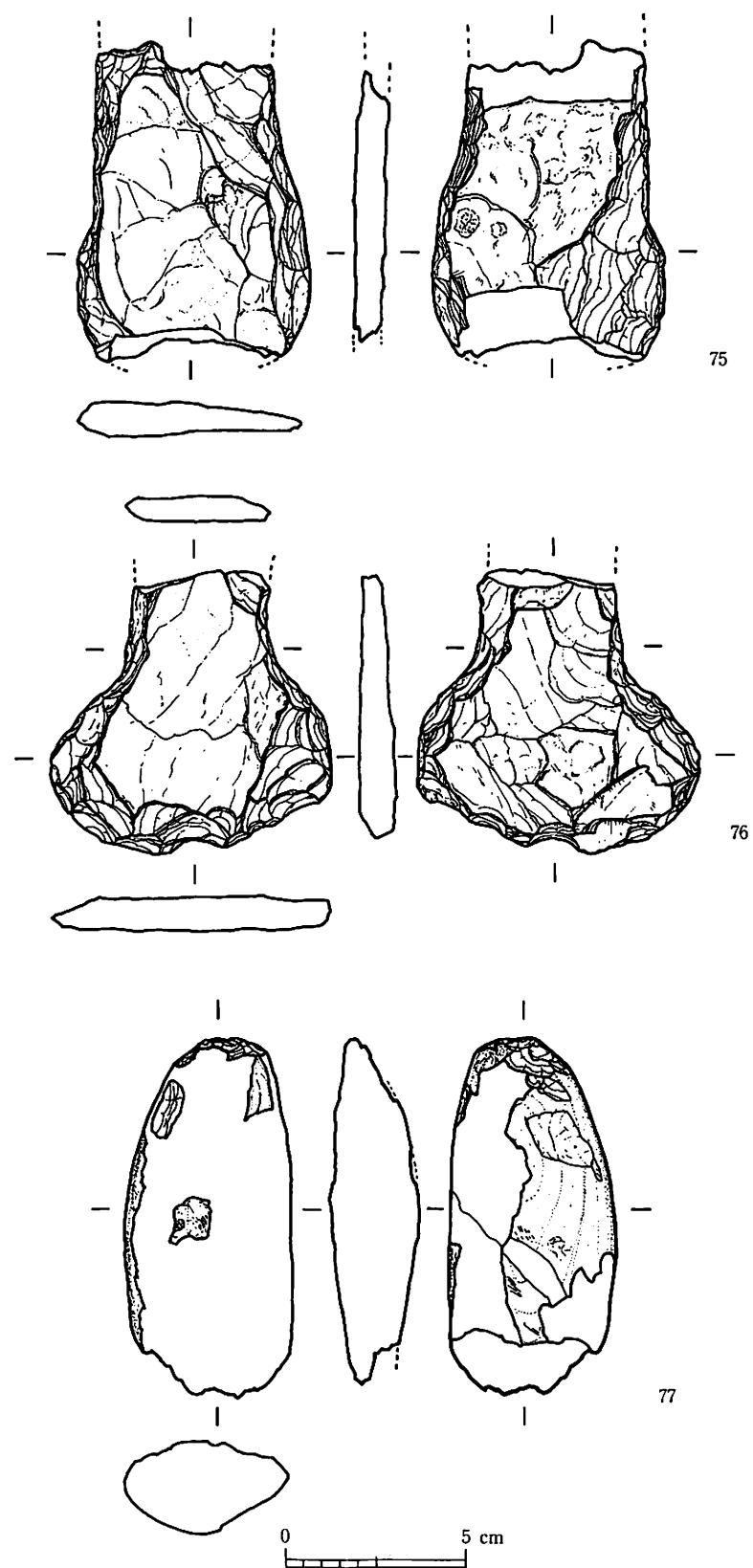
黒曜石系資料は、欠損や瑕瑠が甚だしいものばかりで良好な資料は乏しいが、黒曜石製 (79~86) 8、サヌカイト製 (78) 1の9点を実測した。

第16表 西原遺跡出土遺物観察表4

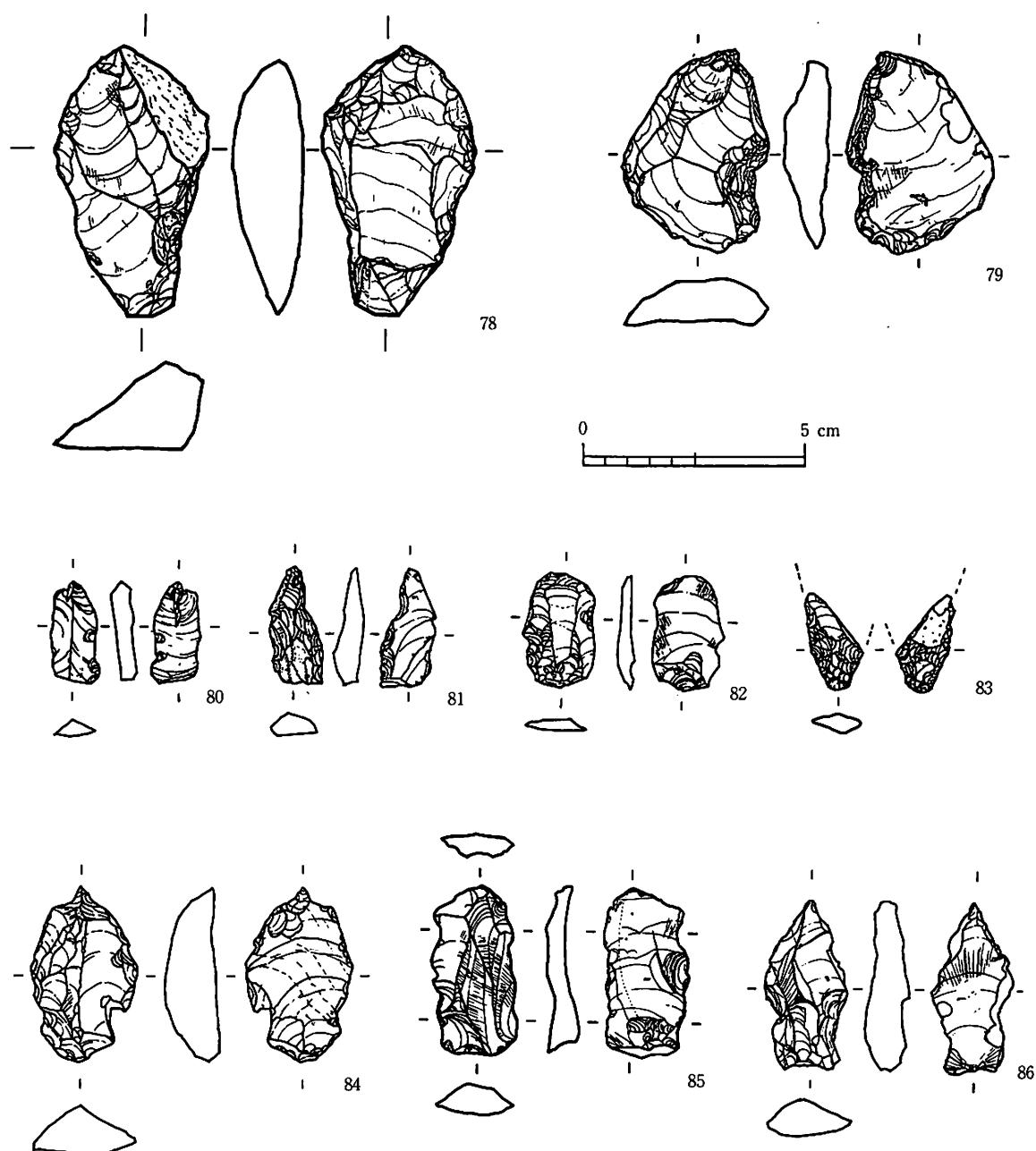
No.	出土状況	器種	石材	計測値 (mm)				備考
				長さ	幅	厚さ	重量 (g)	
70	表採	石鎌	変成岩	37	125	(4)	(37.5)	裏面一部剥離 刃部摩耗
71	表採	打製石斧	変成岩	136.5	54	13.5	199	
72	表採	打製石斧	変成岩	(86)	50	8.1	(74.5)	基部欠損
73	表採	打製石斧	変成岩	(63)	37	不明	(30)	裏面剥離
74	表採	打製石斧	変成岩	(53.5)	50	4.5	(30)	刃部のみ 刃部裏面剥離
75	表採	打製石斧	変成岩	(74)	62.5	7.5	(84)	刃部・基部欠損
76	表採	有肩打斧	変成岩	(73)	77/40.5	9.5	(90.5)	基部欠損
77	表採	磨製石斧	蛇紋岩	(97.5)	40	24.5	(151)	剥離がひどい 刃部欠損
78	表採	搔器	安山岩 (サヌカイト)	57	29	15.5	32	
79	表採	搔器	黒曜石	42	32	10	12	
80	表採	2次加工石器	黒曜石	(21.5)	11	4	(1g未満)	
81	表採	不定形剥片	黒曜石	22	9	3.5	1	
82	表採	不定形剥片	黒曜石	26.5	10.5	4.5	2.5	
83	表採	不定形剥片	黒曜石	25.5	14	2.5	1g未満	
84	表採	細石核未成品	黒曜石	39	23	11	9	旧石器?
85	表採	2次加工石器	黒曜石	37	18	4	5	旧石器?
86	表採	2次加工石器	黒曜石	38	19	10	5	旧石器?



第34図 西原遺跡出土遺物実測図 6



第35図 西原遺跡出土遺物実測図 7



第36図 西原遺跡出土遺物実測図 8

歴史時代の土器 (87~94)

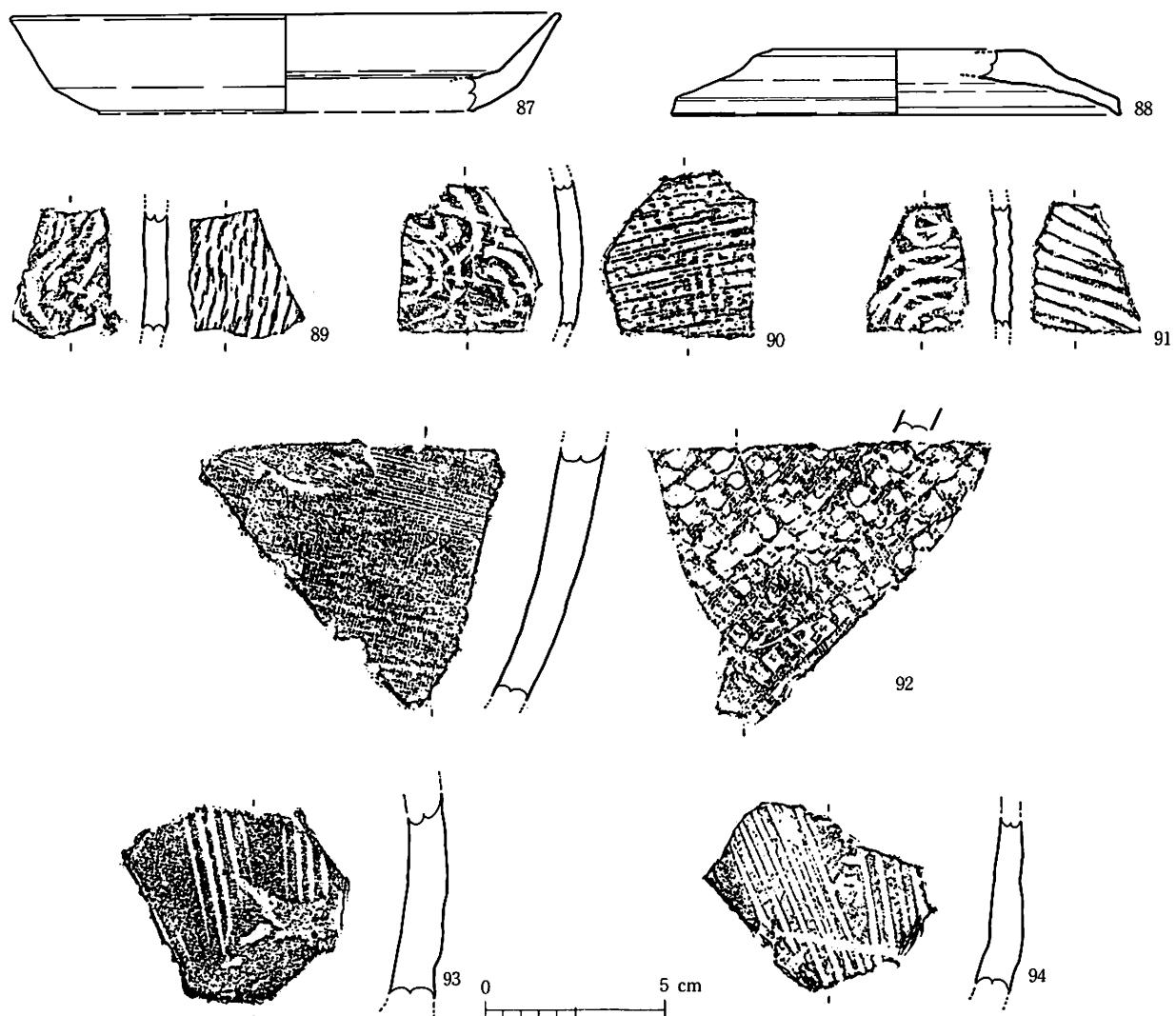
土師器碗 (87) と須恵器 (88~91, 93・94)・瓦質土器 (92) とに分れる。

須恵器はさらに壺蓋片 (88) と壺の胴部破片 (89~91)、そして擂鉢片 (93・94) とに分けられる。

瓦質土器は大壺の胴部破片である。割れ口の1辺は輪積みした粘土の接合面から剥離しており、便宜上その辺を天側と見做した。

第17表 西原遺跡出土遺物観察表5

No.	出土状況	器形 / 部位	法量 (mm) 口径 / 底径 / 器高	色 調	胎 土	調 整	焼成	備考
87	表採	壺蓋 須恵器	126/-/18 反転復元	外面:灰白 (N7/0) 内面:灰オリーブ (5Y6/2)	白色粒をごく僅かに含む 鉄分をごく僅かに噴出する	成形:水引き 分離:ヘラ起こし+ケズリ	良好	外面の一部に 自然釉らしき付着有り オリーブ黒 (7.5Y3/1)
88	表採	甕 / 脇 須恵器	破片	外面:灰オリーブ (5Y6/2) 内面:灰 (10Y5/1)	白色粒5mm 大を1つ含む	外面:縄目タタキ 内面:同心円文	良好	
89	表採	甕 / 脇 須恵器	破片	外面:黄褐 (2.5Y5/3) 内面:灰 (7.5Y5/1)	鉄分をごく僅かに噴出する	外面:格子目文 内面:同心円文	堅敏	
90	表採	甕 / 脇 須恵器	破片	外面:灰オリーブ (5Y6/2) 内面:黄褐 (2.5Y5/3)	白色粒をごく僅かに含む	外面:縄文タタキ 内面:同心円文	良好	
91	表採	碗 土師器	153/106/27.5 反転復元	両面にぶい褐 (7.5YR5/4)	よく精練された胎土 白色微粒子をごく僅かに含む 赤褐色粒を含む 雲母微粒子を含む	成形:水引き 分離:ヘラ起こし	やや軟質	
92	表採	甕 / 脇 瓦質土器	破片	両面灰 (10Y5/1)	白色粒をごく僅かに含む 黒褐色粒を僅かに含む 鉄分を僅かに噴出する	外面:格子目文 内面:ハケ	良好	
93	表採	摺鉢 / 脇 須恵器	破片	外面:灰 (7.5Y6/1) 内面:灰オリーブ (7.5Y6/2)	白色粒を僅かに含む 鉄分をごく僅かに噴出する	外面:指圧痕 内面:櫛描摺目	軟質	
94	表採	摺鉢 / 脇 須恵器	破片	外面:灰 (N6/0と 5/0の中間) 内面:灰 (N5/0)	白色粒6mm 大1、 2mm 大1を含む 褐色粒を僅かに含む	外面:指圧痕 内面:櫛描摺目	堅敏	



第37図 西原遺跡出土遺物実測図 9

c. 土馬

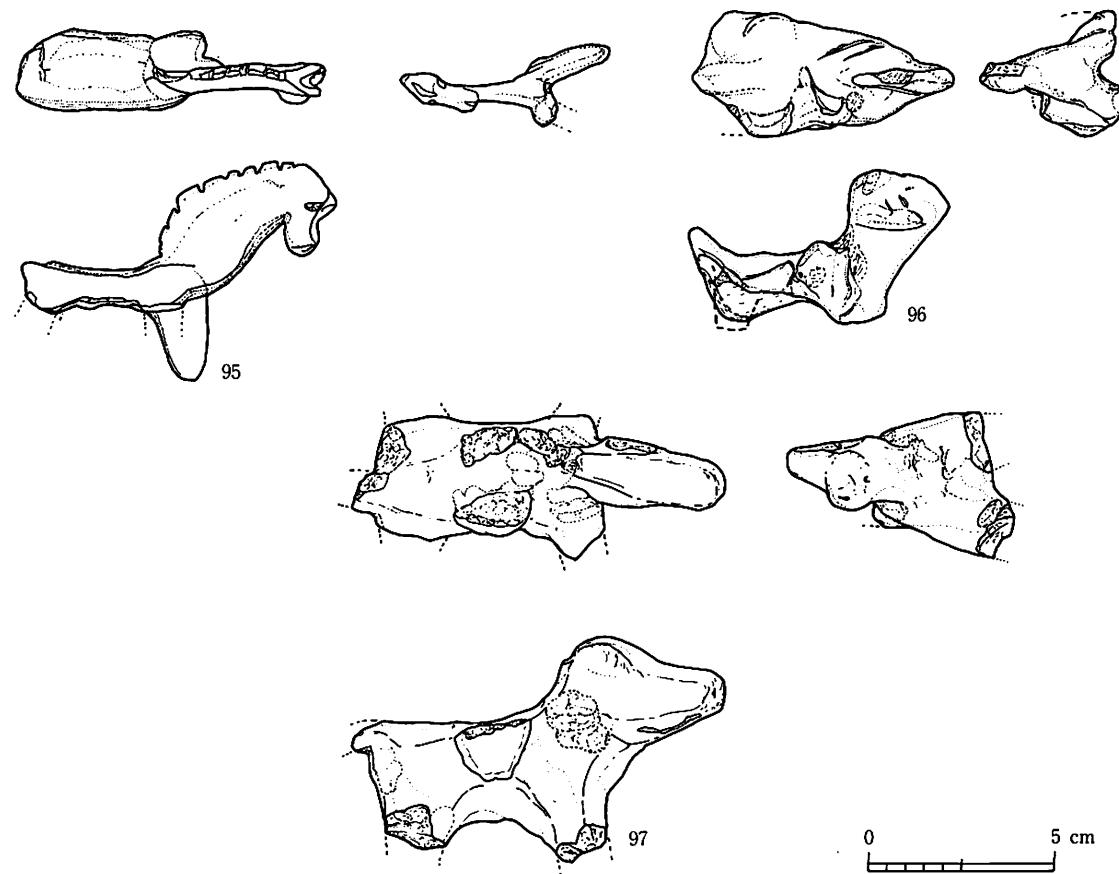
土馬は古代から中世にかけて見られる土製品で、文字通り馬を象っており、井戸など水場遺構における発見例が多く、水への信仰と関係深いとされている。

ここでは、鍋田・川辺台地からの出土資料を挙げる（95～97）。鞍のある個体とないものとがあり、鞍のない個体（95）が写実的であるのに対し、鞍のある個体（96・97）はよりアルカイックな表現となっている。

なお、95・96については、『チブサン』第9号に掲載された実測図をトレスした。

第18表 土馬観察表

No.	出土状況	器形 / 部位	法量 (mm) 口径 / 底径 / 器高	色 調	胎 土	調 整	焼 成	備 考
95	川辺小学校付近	土馬	82/58/18	にぶい黄橙 (10YR7/4)	よく精練された胎土 赤褐色粒を含む 雲母微粒子を含む	手づくね	良好	鞍なし 摩耗が見られる
96	鍋田地内	土馬	67/39/20	にぶい黄橙 (10YR7/3)	よく精練された胎土 赤褐色粒を含む 雲母微粒子を含む 角閃石をごく僅かに含む	手づくね	良好	鞍あり 摩耗が甚だしい
97	椿井地内	土馬	94.5/-/33.5	褐色 (7.5YR4/3)	白色粒を僅かに含む 雲母微粒子を多量に含む 角閃石をごく僅かに含む	手づくね 顎部に指圧痕	堅緻	鞍あり



第38図 土馬実測図

第4章 総括

4-1 遺構

川辺西原遺跡において検出された遺構は3基であった。

1号溝

試掘調査の時点で遺構内から検出された擂鉢片に見られる特徴、すなわち間隔を空けた櫛目描きによる摺目から、中世末期～近世初頭（16世紀後半～17世紀初頭）に属すると考えられる。

1号土坑

第3章でもすでに触れたが、遺構内から検出された遺物はすべて縄文期に属していたもののいずれも細片であり、流れ込みによるものという見方も出来、時期の特定は難しい。唯一、遺構に伴うものと考えられる石も、完全な自然石ではないというだけで正体が判明しない。

ここでは、縄文期の可能性は高いが決め手には欠けるとするにとどめておく。

1号道路

遺構内から検出された磁器に見られる特徴、すなわち胎土に含まれる黒褐色微粒子の存在から、明治～大正期（19世紀後半～20世紀初頭）に属すると考えられるが、染付の技法で大正期以降に見られる銅版転写によるものは認められず、遺物の上では本遺構上層において重複する昭和期道路との連続性を確認できない。しかし、道路の主軸など大きな変化は見られないから、土地利用の基本性格に大きな改変が生じたとは考えがたく、昭和42年の圃場整備に至るまで一貫して道路として機能していたと考えて良いであろう。

鍋田西原遺跡では、昭和42年に実施された発掘調査によってカメ棺墓群が確認されており、付近一帯が墓域であったことは確実であるが、ほかに浅鉢や石器の出土などから、墓域だけでなく生活域の存在を示唆していると考えて良いであろう。しかし、住居址や焼土坑など直接的な生活の痕跡は確認されていない。

4-2 遺物

川辺西原遺跡における遺物はいずれも破片や細片ばかりで、法量の推定が可能な資料に乏しい。唯一、1-A区北のH15調査区外出土資料のみ比較的良好な状態であったが、調査区外ということもあり出土状況は明確でない。

縄文土器

法量についてこそ乏しいものの、調整などに関する情報はある程度を把握し得た。

口縁部は2～3条の沈線をめぐらすもの、横方向への強いハケ痕跡を残すもの、無文で丁寧なナデもしくはミガキを施すものが見られる。調査区外の接合資料で見ると口縁の波形の度合いはそれほど顕著ではない。

胴部は厚手でハケ調整のものが多かったが、調査区外出土資料は薄手である。しかし一方で底部についてはきわめて乏しく、全調査区を通じて1点しか見られなかったことは第3章ですでに触れている。これは調査区外資料についても同様である。

これらの特徴から、縄文期の資料はほぼ黒川式（晩期中頃）と称される形式の範疇に収まると考えてよいであろう。

なお、弥生・古墳時代の土器は出土しなかった。

古代

工事用仮設道路の敷設予定地内から出土した須恵器脚台が1点見られるが、I層土に包含されていたと考えられ原位置の特定は出来ない。

中世

1号溝内の擂鉢をはじめ、若干の出土を確認している。

近代

1号道路に伴う資料のほか、3区で確認されたように調査区覆土のI層およびII層土に含まれている。

石器

川辺西原遺跡から出土した石器は、打製石斧と磨石・敲石がその大半を占めている。磨製石斧は1点のみで、しかも破損が甚だしい。

一方で、黒曜石資料は少ない。形式も不定形のものが多かったほか、石鎌は1点も見られなかった。

西原遺跡

縄文土器

出土した土器に見られる特徴は、波状突起が口縁部の一箇所にのみつく浅鉢、口縁部に沈線文を施すもの、頸部付近に強いハケもしくはヘラ調整痕を残すものなどで、ミガキを施された土器の大半は黒く燻されたものが多く、川辺西原遺跡出土資料と同じく黒川式の範疇に含まれていると見て良い。他方、大型のカメについては、口縁部に刻みや凸帯をめぐらすものがあり、それらの形状にはいくらかの種類があるが、この1群については山ノ寺式と称される一群（晩期後半）に属すると考えられる。

底部は、一括資料にいくらか存在するが接合できるものではなく、あるいは意図的に打ち欠いた可能性も指摘できよう。総じて、口縁部資料ほどには見られないのは川辺西原遺跡と同様の傾向を示しており、興味深い。

弥生土器

2点を確認した。いずれも甕の口縁部資料である。

歴史時代の資料

土師器碗は底部が広めで、比較的大きめである。形状的には山鹿市大字津留で発見された資料とよく類似している。一帯は天正16年（1587）に肥後国衆一揆の舞台となった城村城が築かれており、同一の時期と考えられる。

須恵器壺蓋は割合に扁平で、古代に属すると考えられる。甕は細片であるため詳しくは判らないものの、同じく古代と見做して良いであろう。

瓦質の甕は肉厚で、かなり大型の個体ではないかと考えられる。

石器

西原遺跡に於ける石器の組成は、打製石斧類と黒曜石・サヌカイト系資料とがその大半を占めている。打製石斧類は扁平で直刃のものを主流とし、一部肩部を張り出す有肩打斧が見られる。磨製石斧は川辺西原遺跡同様1点のみで、破損が甚だしい。一方で、磨石・敲石群が見られないのは対照的であり、興味深い。さらに、石鎌を1点出土している。

土馬

時代を通じて生活の痕跡を良くとどめる鍋田・川辺台地において唯一その密度の低い古代であるが、それは生活の断絶というよりはむしろ土地利用の大規模な変革を意味していると考えられる。

第3章でも触れているが、土馬は古代における水（神）への信仰と関わりの深い資料とされており、古代において、本遺跡周辺が水源としての機能を有していたと考えられる。

4 - 3 遺跡の性格

縄文時代に関しては、昭和42年の調査時点すでに一帯が墓域であったことは判明していたが、今回の調査は面積・期間ともに多分に限定的であり遺構・遺物ともに資料が少なく、それを直接裏づけるような結果とはならなかった。

両遺跡の石器組成を比較すると、打製石斧が非常に多く、一方で磨製石斧はきわめて少ない。一帯が出土資料の示唆する縄文晚期中頃にはすでに開墾され、耕作地としての土地利用が展開されていた可能性がある。両遺跡を通じて石鎌が1点も見られなかったこと、西原遺跡において石鎌の出土を見ていることから、少なくとも両遺跡付近には狩の対象となるような森林の存在が希薄であったことは十分に考えられる。

しかしながら本遺跡においては比較的傾斜のある原地形を呈しており、また狭隘で農耕には不向きである。むしろ、粗製深鉢中心の土器粗製、磨石・敲石群の出土、南向きの傾斜地形など、当時の生活空間の存在を示唆していると考えられる。前述の通り本遺跡内からそれを裏づける資料は確認されなかつたが、それほど離れてはいないと考えられる。

一方で、弥生・古墳時代の遺物がまったく出土しなかったことは、ほとんど隣接するように川辺小学校遺跡や保多田古墳（消滅）が立地していることを考えると、非常に興味深い。また古代においては、調査区西隣の仮設道路敷設予定地内から1点のみ確認しているが、I層土内ということもあって確実性に乏しい。弥生時代～古代にかけて本遺跡において生活の痕跡を見出すことは蓋し困難である。

しかし中世に入ると、一転して生活の痕跡をとどめる。1区を横断する形の1号溝は、途中に陸橋部を伴うことから通路ではなく何らかの区画を意図したものと考えられる。また、出土した遺物が擂鉢片というきわめて日常生活に密着したものであることも、本遺跡近辺において当該時期に何らかの生活を営んでいたことの傍証になるであろう。

近世期の直接的な資料は本遺跡において確認されなかつたが、2区で検出された近代の1号道路が現代の昭和期道路と重複していたことは、第3章でも触れたとおり本遺跡周辺の土地利用の基本的性格に変化がなかつたことを示唆しているといえる。少なくとも明治以降、本遺跡周辺が耕作地として利用されていたことはほぼ確実であろう。

参考文献

- 「縄文土器大観 4 後期 晩期 縄縄文」(小学館、1989)
- 「菜畑 佐賀県唐津市における初期稻作遺跡の調査」(唐津市、1982)
- 「九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念」(2000、九州近世陶磁学会)
- 「山鹿市史 上巻」(山鹿市、1985)
- 「チブサン 第9号」
「 ツ 第10号」} (熊本県立山鹿高等学校考古学部)
- 「西日本新聞に見る鹿本・菊池の文化財誌」(山鹿文化財を守る会、1996)

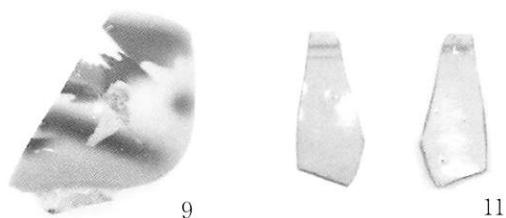
図 版

1号溝



1

1号道路



9

11

1号土坑



6



12



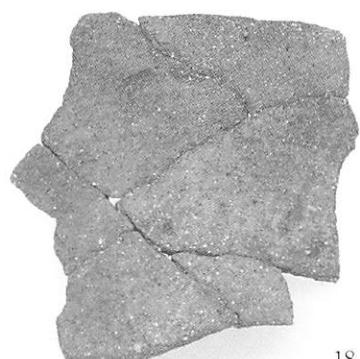
7



10



8



18



2



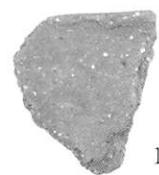
17



16



3



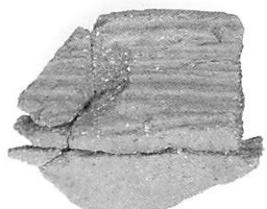
14



13



19



15



20



4



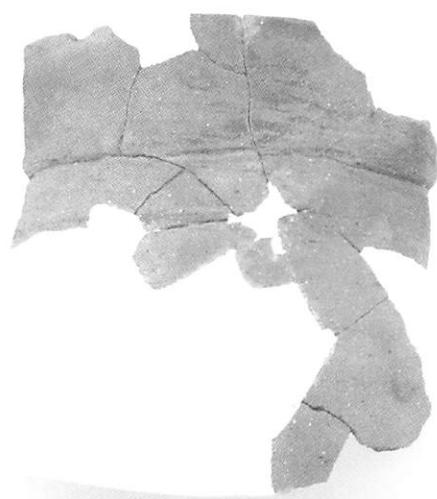
32



41



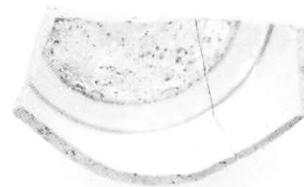
34



38

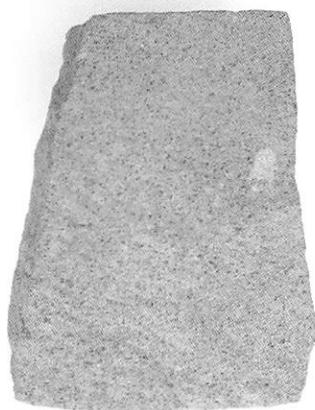


33





35



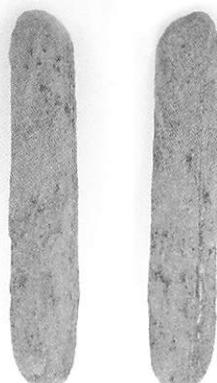
29



21



39



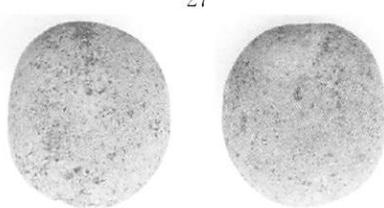
28



23



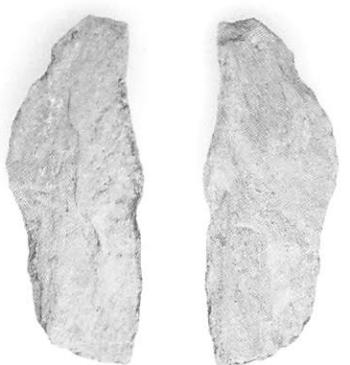
27



26



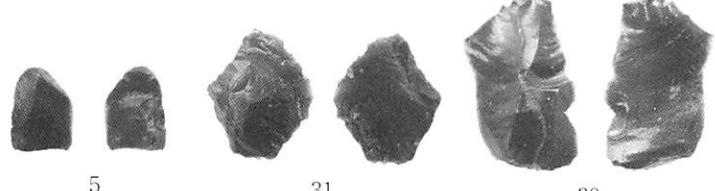
24



22



25



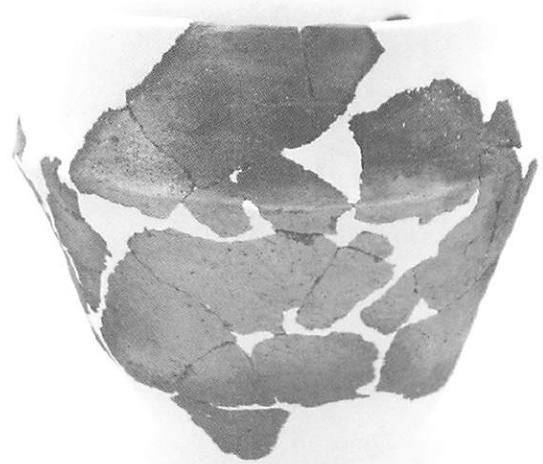
5

31

30



63



64



42



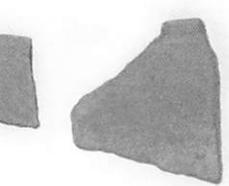
44



45



46



47

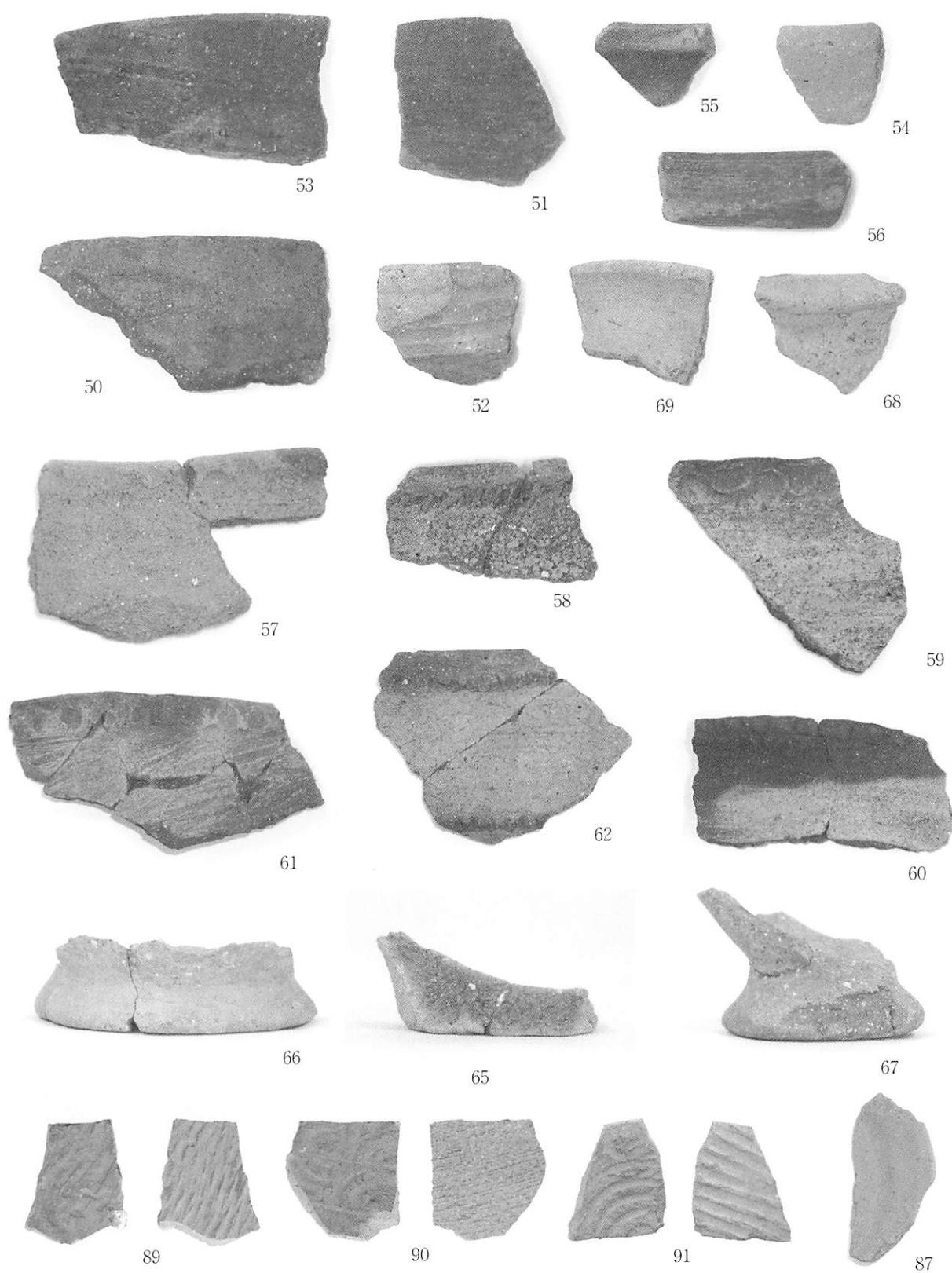


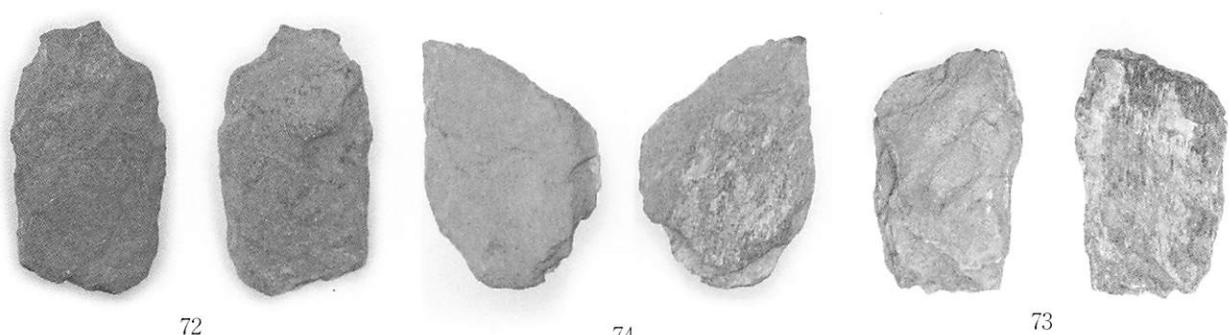
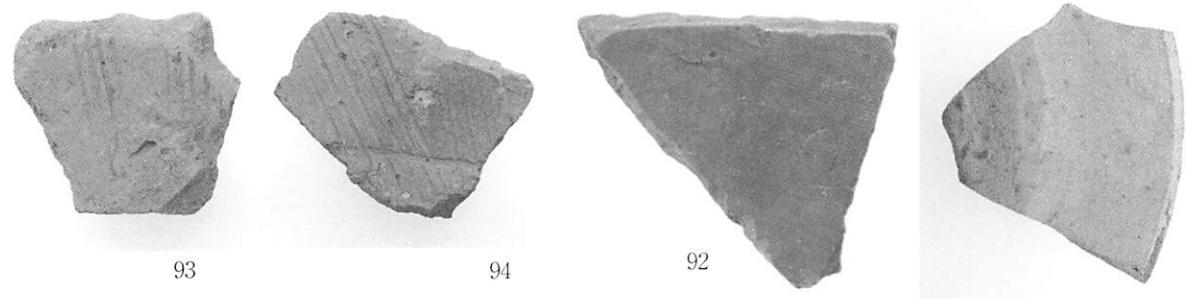
48

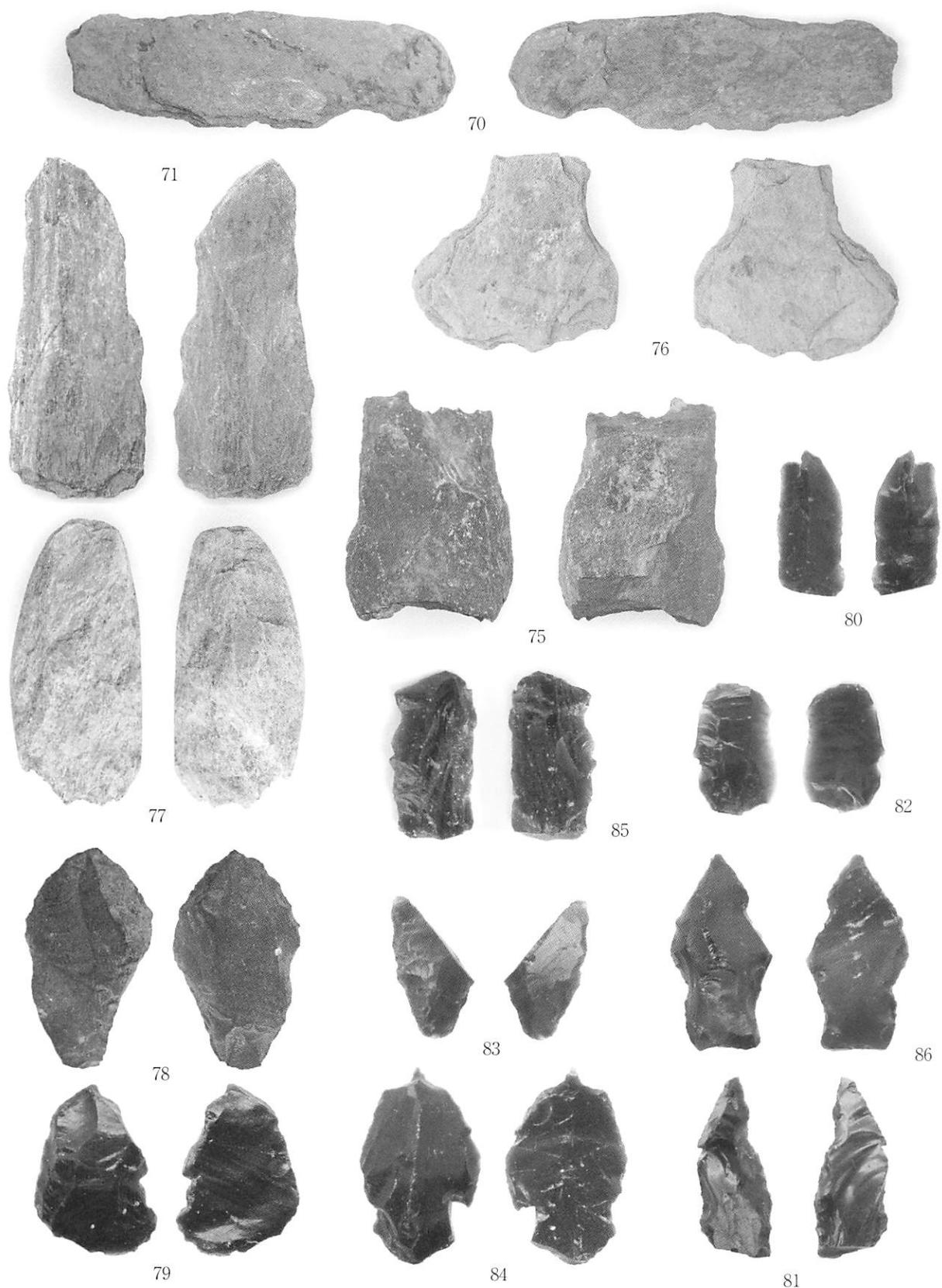


49

口縁部









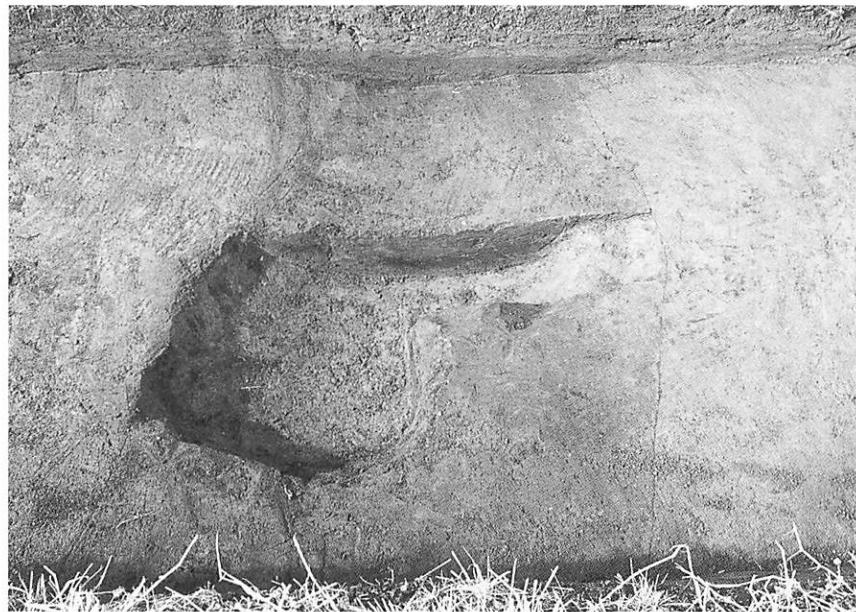
1区全景（北より）



2区全景（北より）



3区全景（北より）



1号溝検出状況（東より）



1号溝断面（東より）



1号溝（完掘）（西より）

P L 10



1号溝延長プラン（東より）



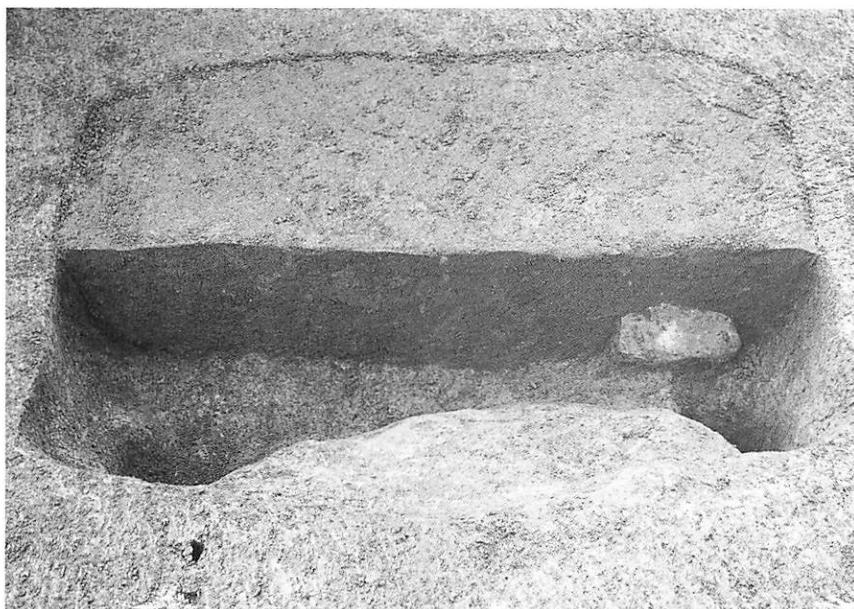
1-A区内土層断面（東より）



1区土層断面全景（北より）



1号土坑検出状況（西より）



1号土坑セクション（西より）



1号土坑完掘状況（西より）



1号道路検出状況（西より）



1号道路セクション（西より）



1号道路完掘状況（東より）



2-D 区土層断面（1号道路付近）



2 区土層断面全景（南より）



2-G 区土層断面（東より）



調査区周辺風景（北より）



作業風景



調査現場作業員

山鹿市文化財調査報告書 第15集
川辺西原遺跡

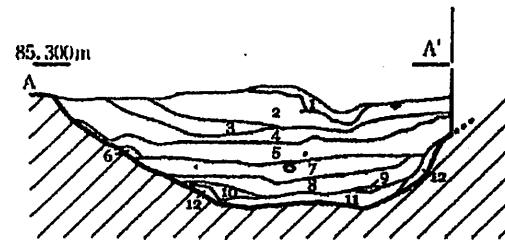
平成16年3月31日

編集 山鹿市立博物館
〒861-0541 熊本県山鹿市大字鍋田2085
発行 山鹿市教育委員会
〒861-0501 熊本県山鹿市大字山鹿1026-2

『川辺西原遺跡』山鹿市文化財調査報告書第15集 熊本県山鹿市教育委員会2004年 正誤表

下記の箇所に誤りがありましたので、お手数ですが訂正願います。

頁	誤	正
24頁 第18図		右図と差し替え
27頁 第21図 遺物番号	21	22
27頁 第21図 遺物番号	22	21
31頁 10行	3個体分	6個体分
38頁 3行	鋤先状	三角状
38頁 第15図	鋤先口縁	三角口縁
43頁 第17表		下表と差し替え



No.	出土状況	器形/部位	法量(mm) 口径/底径/器高	色・調	胎土	構造	焼成	備考
87	表探	碗 土師器	153/106/27.5 反転復元	両面にぶい緑(7.5YR5/4)	よく精練された胎土 白色微粒子をごく僅かに含む 赤褐色粒を含む 黒母微粒子を含む	成形:水引き 分離:ヘラ起こし	やや軟質	
88	表探	壺蓋 須恵器	126/-/18 反転復元	外面:灰白(N7/0) 内面:灰オリーブ(5Y6/2)	白色粒をごく僅かに含む 鉄分をごく僅かに噴出する	成形:水引き 分離:ヘラ起こし+ケズリ	良好	外面の一部に 自然釉らしき付着有り オリーブ黒(7.5Y3/1)
89	表探	壺/胴 須恵器	破片	外面:灰オリーブ(5Y6/2) 内面:灰(10Y5/1)	白色粒 5mm大を1つ含む	外面:網目タタキ 内面:同心円文	良好	
90	表探	壺/胴 須恵器	破片	外面:黄緑(2.5Y5/3) 内面:灰(7.5Y5/1)	鉄分をごく僅かに噴出する	外面:格子目文 内面:同心円文	堅硬	
91	表探	壺/胴 須恵器	破片	外面:灰オリーブ(5Y6/2) 内面:黄緑(2.5Y5/3)	白色粒をごく僅かに含む	外面:網目タタキ 内面:同心円文	良好	

正誤表

『川辺西原遺跡』 山鹿市文化財調査報告書 第15集 熊本県山鹿市教育委員会2004年

本文中

頁	行	誤	正
23	15	埋没状況(第19図)	埋没状況(第18図)
図版	PL3	(番号)21	22
	PL4	(番号)22	21
		1号土坑検出状況(西より)	1号土坑検出状況(北より)
	PL11	1号土坑セクション(西より)	1号土坑セクション(北より)
		1号土坑完掘状況(西より)	1号土坑完掘状況(北より)

土器観察表

頁	番号	誤	正
26	30	※31と内容が入替っている	番号を31へ
26	31	※30と内容が入替っている	番号を30へ
34	62	法量: 246/-/-	法量: 346/-/-
38	63	法量: (470/480/112)	法量: (470)/(112)/(463)
39	70	計測値: 長さ 37 幅 125	計測値: 長さ 125 幅 37
39	74	計測値: 長さ (53.5)	計測値: 長さ (63.5)
39	77	計測値: 幅 40	計測値: 幅 455
39	78	計測値: 幅 29	計測値: 幅 34
39	81	計測値: 長さ22/幅9/厚さ3.5/重量1	計測値: 長さ26.5 /幅10.5 /厚さ4.5/重量 2.5
39	82	※83と内容が入替っている	番号を83へ
39	83	※82と内容が入替っている	番号を82へ
39	86	計測値: 幅 10	計測値: 幅 8.5

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市文化財調査報告書第15集 川辺西原遺跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名:山鹿市文化財調査報告書第15集 川辺西原遺跡

川辺地区県営土地改良総合整備事業に伴う発掘調査

発行:山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話: 0968-43-1651

URL:<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日:2025年7月4日